綠色。總狀に簇生す。直接食用ともなり、汁から葡萄酒をも製する。種類としては、西洋種ではキヤンベルス、ナイヤガフ、ワシントン等、日本種では甲州葡萄か名高い。

葡萄酒。　赤葡萄酒、白葡萄酒の別がある。葡萄の果實を碎きつぶして搾つた汁を桶に盛り之を醱酵させて釀造する。普通飲料用と藥用との二種類がある。

四、練　習

十分に讀ませ書かせ話させる。

書取としては、實。棚。美。叔父。黑。種。種類。酒。作。造。ブドウ。チガフ。等を練習させる。

語句としては、サシテ。フサ〳〵。黑ミノアル。等を使用させる。

## 二十五、熊のささやき

一、要　旨

眞の友情は死に面しても變らぬものであること。危急の大事變に際して變心するやうな友とは交際せぬやうにせよ。是が一篇の要旨である。子供が此の文章を讀んでいくうちに、二人の者が熊に出合つた場合を想像し、自然と此の文旨にふれていくやうにしたい。

二、指導方針





練習文であるから、兒童が他の力を借りることなしに獨力で味ひゆくやうにしたい。取扱者は餘りにくどい立入り方をせず、指導の方法宜しきを得べきである。そして自學的興味を助長して行きたい。熊の言として逃げ後れた旅人の感想を諷刺たつぷりで述べてある所、深く考へさせる所である。

三、教材研究

(1)「語句」

もう。既にはや。

たふれて。倒れて。ころがり地上に伏して。

死んだふり。死んだ體を裝ふ。死んだまね。

手を着けない。食ひつかないこと。

からだ中。全身。からだ全部。

うん。いやの反對。

つきあふな。お友達とするな。交際するな。

(2)「文章」

出典はイーソップ物語。文章も內容も可なりに洗練されてゐる。最後の教訓は少し露骨すぎるけれ共、一つは子供相手にしてゐるのでもあるし、實際あの場面としてあれだけのことを言ひたいのは

當然であらう。

文章には旅人甲乙の性格が可なりによく表現されてゐる。

「二人は早く見つけて木の上へかけ上りました。」

「どんなにこはかつたらう。僕は木の上でびく〳〵してゐた。」

巧言令色少しも友情のこまやかさがない。

「うん、あぶない時に友だちをすて〻逃げる者にはこれからつきあふな、といつた。」

相手の心臓を抉るやうな力強さである。果して熊の言か。旅人甲の言か。旅人の言とすれば何故にかういつたか。

相手の無情に對する燃ゆるやうな憤怒の情がかくも露骨の言となつたことをさとらしめる。

練習としては、ふり。かぎまはし。びく〳〵。等を使用させて練習するとよい。

## 二十六、東京停車場

一、要　旨

東京驛の壯大殷賑の光景を叙して帝都の玄關ともいふべき東京停事場の狀況を知らせようといふのが主である。尙これと共に「停」「洋」「帝」「役」「左」「右」「央」「局」「替」「賣」「洗」「降り」





「發」「動」「力」等の文字を知らせる。

二、指導方針

卷五の卷頭に「大日本」の課を置いて皇室の尊嚴を說き、卷末にこの教材を置いて、我が國勢の發展の著しいことを述べて居る。この外に本卷には金鵄勳章とか、熊襲征伐とか、養老とかの教材がとり入れられて居る。これ等をもつて見ると編者は此の卷五に於て日本主義を徹頭徹尾發揮しようと努めたのだといことが明かに知られる。

文章の說明もなか〳〵洗練されてゐる、位置をいひ、大いさをいひ、次に內容につき部分々々を詳細に說いてゐる。取扱者はかうした所に考へを置いて指導していくやうにしなければならぬ。

三、教材研究

(1)「文字」

三階造（サンガイヅクリ）間口（マグチ）中央（チユウワウ）分室（ブンシツ）兩替店（リヤウガヘテン）賣店（バイテン）洗面所（センメンジヨ）乘降り（ノリヲリ）

(2)「語句」

東洋。普通亞細亞洲、大洋洲をさしていふ。

赤れんぐわ。赤色の煉瓦。

階上。役所は中央鐵道管理局、ホテルはステーション・ホテル。
待合室。乘客又は出迎見送人の休息してゐる部屋。
中央郵便局。全國郵便局中最も大なるもの。
兩替店。貨幣を取替へてくれる店、一圓について何錢とかの手數料をとつて小さいおあしに取り換へてくれる所。
賣店。驛の構内にあり、日用品、旅行用具、新聞雜誌、玩具等を賣つてゐる店。
食堂。食事をする部屋、精養軒の經營にて階下にも階上にもある。

**四、教材取扱及練習**

一通り調べさせて新字の分らぬものの讀み方を教へ通讀させる。次に挿繪を參照しつゝ各節の內容及語句の取扱をする。規模の大なる所を理解させる爲めには教師の實見談を附說するがよい。

書取練習としては、東京停車場。東洋第一。宮城。間口。階上。三階造。帝室用。役所。待合室。左右。中央郵便局。分室。兩替店。賣店。洗面所。食堂。乘降り。汽車。發着時刻。自動車。馬車。人力車。見物。赤れんぐわ。等を練習する。

又語句の使用練習としては、第一。赤れんぐわ。向つて。もあれば。となく。さして。等について短文を構成させるとよい。





# 尋常小學 國語讀本 卷六

## 第一、俵の山

**一、要旨**

收穫期に於ける農家の半日の有樣を、兒童の立場から見て書いたもので、此の時期に於ける農村の喜びと平和な氣分とを味はせるのが要旨である。尙これと共に、「去年(キヨネン)」「俵(ヘウ)」「飯(メシ)」「飯(ハン)」「卵(タマゴ)」「俵(タワラ)」「丸(マル)」「湯(ユ)」「拾(ヒロ)つて」等の文字を授ける。

**二、指導方針**

田園の農業生活の氣分を味はせるやうに取扱はなければならぬ。文章から受ける感じは農村の兒童より却つて都會の兒童の方が强いかも知れない。といふのは農家の兒童は十歲十二三歲位にもなればもうかうした平凡な環境に興味を感じないだらうから。それ故農村の兒童には主として此の文章の表現について鑑賞させるやうに取扱はなくてはならない。都會の兒童には此の場面が十分に想像出來るやうに補說しながら鑑賞させて行かねばならぬ。

文章の内容としての喜びは、あくまでも大人の喜びで子供としての喜びでないことを教授者が承知してゐなければならない。

三、教材研究

(1)「語句」

今の分では。今の豫想ではといふ意味。

あの稻。稻の種類を指して言つてゐるので會話をしてゐる二人の間にだけ理解されてゐる。

稻こき。こくとは搔き落すこと。一見櫛の齒のやうな鐵製の稻こき機にかけて稻の穗をしごいて籾をこき落すこと。

もみをかへして。　籾とは米の殼を取り去らない時の形。籾は席の上に擴げて乾かす。それを成可く乾くやうに時々搔きまぜて籾の位置をかへる。

卵。鷄卵のことである。

土間。どま。屋内の仕事場。床板なく土のまゝを踏み固めたもの。

丸太。丸木。山から伐つて來たまゝの圓く長い木。

する。磨るとも碾（ヒク）ともいふ。碾臼（ヒキウス）を廻して籾を入れ籾殼を取り去り玄米とする。





ときを作る。牡鷄が、大體の時刻を報ずること。「コケツコー」の鳴聲である。

(2)「文章」

まづ題目のつけ方から考へてみるのに、俵の山は面白い。月並を離れて作者の第一印象そのまゝを以てした所に題目の創作味がうかがはれる。文章全體としての氣分は、靜けさと平和のうちに、何かしら悅ばしい氣持。然し子供自身の衷心からの喜びからは遠い感じがする。

兩親たちの喜びと勇氣、それが何とはなしに作者の心にも喜悅としてうつつてゐるらしい。

「今年は本當に豐年だ、今の分では去年より七八俵よけいに取れさうだ」

是は作者の父とみてよからう。

「さうです。新田が大變よく出來ました。來年もやはりあの稻をつくりませう」

これは母の言であらう。言知れぬ喜びの漲つて居ることと、その尊卑の言葉遣に注意しなければならない。

お祖父さんが籾をかへしてゐる所へ卵賣が來て卵を買つて行つた所は俵の山に關係がないやうであるけれども、田舍の實況を現はすのに有力な材料で、事實かうした出來事は削除せぬ方がよいことを味はせる。

祖父さんが庭で腰をのばして「もうお晝かなあ」といつたのを見ると、この祖父は餘程耄錄して居る

やうである。

最後の俳の上で、鶏がときを作つたといふのは少しおかしい。土間といつても俳の山は屋内の小暗い所に積み重ねられてゐるのだから。然し氣分としては確かに農家の收穫時の味ひが出てゐる。

**四、教材取扱**

教材は分切することなしに全部を提供して何べんも讀ませるやうにする。その間に難しい文字や語句を質問によつて扱ふ。農家の子供なら各自の經驗によつて聯想せしめ、都會地の子供であつたら教師の實見談でも話して聞かせて想像に導いていくやうにする。

想像の結果、作者は尋常三年生位の男子、勿論農家で家族は父母、祖父、その外に作者の兄姉が居るのかも知れない。そこらは兒童の想像にまかせるがよい。

語句深究の後は、語句の使用や、類語集めをさせたりする。文字についても類字を集めさせたり熟語をつゞらせたりしてみるがよい。

去年。死去。逝去。百俳。土俳。俳装。朝飯。赤飯。卵やき。卵とぢ。炭俳。米俳。丸山。本丸。丸の内。湯殿。拾物。玉拾。

今の分では今年も優勝するでせう。

今の分では助かる見込がない。





よけいに慾ばりやでも困る。

よけいに茸をとりすぎた。

今日はおばあさんと姉さんのおろす居です。

おろす居ばんをしてゐると淋しい氣持です。

一山拾錢のみかんがありました。

もみの一山は拾俳づつです。

こぼれ米。こぼれ麥。杉丸太。杉木丸太。

## 第二、日本の高山

**一、要旨**

日本に於ける高山又は名山についての知識を得させ、併せて山に關する常識と趣味とを養ふのが目的である。形式方面では會話叙事體のうちに巧妙に所期の内容を進捗せしめて居る技術を鑑賞せしめ、文字としては「晩」「寒く」「次」「以上」「世界」「岡」等を知らせる。

**二、指導方針**

教材は地理的のものではあるけれども、文學的趣味を離れての地理教授的扱ひをしたのでは國語教

投の價値を失つてしまふ。やはり行文の面白さ作者の構想のプログラム等について考へてみるやうにしなくてはならぬ。

一萬三千尺といつた觀念は中々想像のつかぬものであるから日常視察の高さを基準として取扱ふやうにしなければならぬ。

敬語や順序によつて兄と三郎との詞を識別させ、讀み方話し方の際にも役割をきめて行つてみたら興味があるだらう。

三、教材研究

(1) 「文字」

山（サン）高（カウ）新高山（ニヒタカヤマ）外（グワイ）都（ト）

(2) 「語句」

めつきり。急に。にはかに。際立つて。

もう雪だらう。雪が降つてゐるだらう。

「雪だ」「雪だらう」の二つを比較させる。

何しろ。何といつても。何といつたつて。

内地。北海道又は植民地（臺灣、樺太）其他の島々から日本本土をさしてのこと。





めつたに。稀にしか。どうかした時でなければ。

たしか……とおぼえてゐる。はつきり斷言は出來ないが單なる自分の記憶ではかうだ。

とは限らない。ときまつて居るわけではない。

そこ〳〵。に足るか足らぬか。

先づ。まあ。早い話しが。手取り早くいへば。

(3) 「文章」

ふとん着て寢たる姿や東山。

京都東山の冬の様を主觀的に形容したもので三十六峰うね〳〵となだらかに南に走つてゐる姿は丁度人が布團を着て寢て居るのと同じだといふのである。京都の地勢は山高からず水早からずで見る物悉く優美な感じがする。殊に東山などはなだらかな處は京都の特長を示して居るとも思はれる。

布團着てといふ形容も實に其の様に適切であるといつてよい。

作者は服部嵐雪。淡路の人、江戸に出て芭蕉の門人となる、蕉門十哲の一人として知られてゐる。

尙嵐雪の句には

元月や晴れて雀の物語り。　櫻一輪々々づつの暖ふさ。　黄菊白菊その外の名はなくもがな。

(4) 「事實内容」

教材中の山の高さ。

新高山（一萬三千尺）　シルヴィア山（一萬二千九百尺）
秀姑巒山（一萬二千六百尺）　富士山（一萬二千五百尺）
白根山（一萬五百尺）　槍岳（一萬二百尺）
赤石山（一萬二百尺）　春日山（九百三十尺）
三笠山（一千百三十尺）　東山（一千二百二十尺）
エベレスト（ヒマラヤ山中の最高峯）二九〇〇二呎）

挿繪の新高山は新高連嶺を示すものでシルヴィア連嶺の西に並行する。宗岳山脊高く南北に延び南北各約二千二百米。北山（海拔一萬二千五百八十尺）南山（一萬二千五百四十尺）東山（一萬二千八十尺）西山（一萬一千七百尺）此のうちの最高嶺を主山といひ總括して新高山と號す。

**四、教材取扱及練習**

教材は分切しないで全部まとめて提供したい。但しどうしても子供の程度が分切しなければ都合惡いやうでのつたら大體三段に分けて取扱ふとよい。

通讀しつゝ文章の對話であること、兄弟のうち何れの部分が誰かを考へさせる。その間に適宜補說を加へ、高山の部から名山へと、趣味深く取扱つていくとよい。文字は類字や熟語を書取らせ語句等





も使用させるやうにするとよい。

毎晩。晩方。寒い夜。寒さしのぎ。月山。つくば山。市內。家內。高等。新高山。新なめさい。次男。以上。以下。外國。郊外。世界見物。銀世界。都市。都會。岡田。丸岡。

此の頃はめつきり白髮がふえました。

何しろあの人は勉强家だから一番も尤もだ。

あの事のあつたのはたしか去年の今頃だと思つてゐる。

高い品物は必ずよい物と限らない。

お祭りに來た人は百人そこ〳〵だ。

## 第三、ヤクワント テツビン

**一、要旨**

藥鑵と鐵瓶との論戰といふ形で銅と鐵との優劣を面白く仕組んだ擬人文である。是によつて銅と鐵とが何れも人生に必須な金屬であることを知らせやうといふのが主眼である。尙是と共に、「金物屋」「仲間」「銅」「指」「安」「鐵」「釘」「艦」「之」「使ふ」「毒」等の漢字を知らせる。

**二、指導方針**

理科的教材を擬人法により而も會話の論戰の形にした所は面白い。しかし文學的趣味とまではいかない。內容は餘りにも喧騷の感さへあつて上品さがない。文章としては別に味ふ所はない。しかし子供の本能からいつてかうした議論ですゝむことには相當興味をもつであらう。指導者は金屋の効用を知らせることと、數多の漢字を授けることで相當骨の折れることであらう。然し單なる理科的の知識の授與とか理窟の穿鑿のみに陷ることは國語教授として失敗である。注意すべきである。

三、教材研究

「語句」

ヤクワン。藥鑵。もとは藥を煎じるに用ひたものだが後には專ら湯を湧かすに用ひる。陶器製を土瓶といひ銅製を藥鑵といふ。

ジマン話。自分の長所美點を誇り顏に話すこと。

オアシ。錢である。貨幣のこと。昔は錢は汚いものとしてお足といつた。

シタガツテ。或事が原因によつて或結果の生ずる時にいふ。例話法で理解させる方よし。

ソレニヒキカヘテ。それに引き比べて、それと反對にといふ意。

シテミレバ。これによつて考へると、それだから。

モツト。それよりもなほ。今少し。





サビ。鐵の錆は酸化鐵で赤く、銅の錆は酸化銅で青く俗に綠青といひ有毒である。

シカモ。其の上。おまけに。

四、練　習

金澤。金槌。仲間。仲人。銅器。銅線。指先。小指。安物。安賣。鐵道。鐵棒。釘拔。釘箱。艦長

艦隊。之を。使人。馬使。毒藥。毒蛇。

二人はしばらく語り合ひました。

二人の劍客はしきりときり合ひました。

朝夕は大へん寒くなつた。それにひきかへて日中はなか〳〵暑い。

私の方はずゐぶん寒い。それにひきかへてこちらは大變暖い。

あの人は運動する。したがつて體格がよい。

あの人は勉强する。したがつて成績がよい。

それはなるほど面白からう。

なるほど君は中々の理窟やだ。

君は僕以上に力が强い。然し僕は君以上に目方はある。

もうぢきに十一歲になる。

もうぢきに十一歳になる
もうぢきに四年生になる。
天氣になりさへすれば遠足をする。
本を讀みさへすれば意味がわかる。

## 第四、きのこ取

一、要　旨

茸狩の場面を想像させ、秋の山の氣分を味はせると共に、山林生活の趣味と、人情美とを味はせ、尙之と共に「折る」「意」「初茸」「紅色」「落葉」「三軒家」「住めば」「木びき」「教へ」「列」「禮」等の漢字を知らせる。

二、指導方針

趣味教材である。理科的方面の深究に過ぎてはならぬ。主として文章の味ひ、秋の山の面白く趣多い所を捉へさせるやうにしなければならない。文中表面だけでなく、內容を考へさせられる點が多い。

ぐみの枝を一枝折ると、
「そんな大きな枝を」と兄さんに……





そんな大きな枝を折つては物體ないと自然の美しさを壞しまいと注意する兄の心持。
紅茸は毒だと聞いて、
「ぐみも紅茸も地面へなげつけました」
如何にもびつくりした心持がよく讀まれる。
「じめ〳〵した落葉をふんでねずみ茸をとつた。
ねずみ茸の有場所が說明されて面白い。
「山の中でも三軒家でも、住めば都よ、わが里よ」
單に力藏の鼻唄とばかりもいかない。作者は此の唄の中にも山家生活の美を高唱しゐるつもりらしい。
「おがくづが大そうよくにほつてゐました」
ひき立ての生木の匂ひ、深い林の趣、何んといふすが〳〵しさであらう。
「さあ、まだ早いかも知れないがね」
ぶつきらぼうの力藏の言葉遣ひ、よく力藏の性格と職業とを感じさせる。然し、栗林の下の窪地を教へてくれたり、一雨ふつたら又お出で、といつたりする力藏の親切がよくわかる。
小さな、しめぢの列をふまないやうに注意したのは成長をまつて又來てとる考からか、小さいのを

ふむのはかあいさうだと思つてか。力藏の言を考へて見ると前者であるらしい。

三、教材研究

(1)「語句」

からりと。奇麗に。名殘なく。

注意された。こゝでは少ししかられた意味。

じめ〳〵した落葉。濕氣を含んだ落葉。

山の中でも三軒家でも住めば都よ、わが里よ。これが自分の家だと思ふと何のさびしいこともない。

やはり都のやうな氣持がしてなつかしく離れにくい。

おがくづ。鋸屑のこと。

(2)「事實內容」

ぐみ。胡頽子科に屬する亞灌木。夏秋の頃圓形又は楕圓形の小顆が實る。熟すれば赤く甘味又は酸味をもつ。粒に大小あり、霜降り色となれば食して毒なし。

初茸。松の根方又は一般の芝草中に生ず。全體灰色の中に帶綠色の所あり。食用として珍重さる。

紅茸。傘莖ともに美しい紅色。有毒菌。

ざふ木林。栗。楢等種々の材木の繁茂してゐる林。





ねずみ茸。鼠の足に似てゐるためにいふ。群をなして簇生する。味香氣ありて美なり。

しめぢ。山の中の濕地に生ず。形松茸に似て小さく叢生してゐるのを千本しめぢといふ。

四、讀　書

骨折。中折帽。注意。意地。初午。初茸。松茸。茸がり。紅花。紅そめ。落葉。落つばき。わら家

あばら家。住居。一人住。住吉。木の葉。木の實。教草。生徒の列。行列。お禮。禮ぎ。

からりと空がはれて圓い月が出ました。

先生に注意されて始めて氣がついた。

雀はびつくりしてとび立つた。

林の中のじめ〳〵した所に茸は出る。

ば〳〵らとおがくづが落ちてきて山の形になる。

生徒は列をつくつて教室に入る。

五、參　考

有毒菌の見分け方。

(1) 色毒々しいほど美しいもの。　(2) 香の惡いもの。

(3) 苦味辛味のあるもの。　(4) 乳のやうな汁の出るもの。

(5) 柄の折れ易いもの。　(6) 夜光るもの。
(7) 押せば埃の出るもの。　(8) 傘の表裏に疵あるもの。

## 第五、海

### 一、要旨

海の時化を描いた散文と、なぎを歌つた韻文とで共に叙事に近い筆法である。一に於ては物凄い何物かを暗示するやうな光景を、二に於ては長閑で平和な光景を、如實に想像させて海の氣分を味はせる。尙之と共に「鉛」「次第」「濱」「身」「波」「岩」「船」「沖」等の文字を授ける。

### 二、指導方針

どちらも面白い文學教材である。一は物凄い他は長閑な景色をそゞれ巧みに描寫してある。そして寸分の隙のない筆づかひで卷中の優良小品である。然し海岸に遠い土地の兒童、殊に海に經驗のない兒童には想像出來ない點が多からう。

漁夫の生活などを敷衍して了解させるやうにしたい。

しけの方の文章については、

擬人化した物凄い勢の筆勢で描かれてる。





「風がひゆうつと、うなつて來るたびに、濱の松は身をふるはせて頭を地に着けさうにします。」……

風も松も擬人的である。

「うちよせて來る波は岩をかみ、小じやりをとばしては、さあつと引いて行きます。」

波が擬人的扱を受け目の前に實景が見られるやうである。

なぎの方の歌。

先づ第一段で水天髣髴の廣大な海の景色が想像される。次に第二段でのんびりした漁村の光景が眼前に浮いてきて、一般と趣が深い。

### 三、教材研究

(1) 「語句」

しけ。　暴風雨のこと。特に海岸地方でいふ。

なぎ。　海岸の無風の狀態をいふ。隨つて海上も波穩かである。

鉛色の空。　颶風襲來前の青灰色の雲の重り合つた一種物凄い空模樣を形容していふ。

次第々々に低く云々。　雲が下へ押し合つて降りて來るから空が低くなるやうに感ずる。

うちよせる。　うちは接頭語で寄せるに語勢を添へてゐることば。

うなり。　物凄い響きが動物の唸るやうに。

身をふるはせて。　大風のために松が身ぶるひするやうに見た。
波は岩をかみ。　波が岩にかみつくやうである。
もとより。　勿論。いふまでもなく。
ひぼし。　干乾。食物がなく飢死すること。
れふし。　漁夫のこと。
のどか。　暖かに風もない平和な日。
ゑがほ。　につこりとした笑顔。

(2)「文章」

空は藍を溶かしたやうなみどりである。
海も同じやうに紺青の色をたゝえてゐる。
その紺青の空を遙か見渡せば果ては海のみどりとつゞいてゐる。又海の紺青に眺め入つて彼方へ目をやれば空の紺青とつづいてゐる。空もまるで鏡のやうで海も亦鏡のやうである。ちやうど二枚鏡を開きかけたやうでその末は一つになつてみえる。
沖も濱も一樣に風の凪いだ氣持よい日和だ。
濱の方から釣に出かける兄の小舟は沖へ、





沖の方から釣して歸る父の小舟は濱へやつてくる　ちやうど途中で二艘の小舟はすれ違ふ。
「おや、もうおかへり」
「お、今行くのか」
父と子とは互に顏見合せてにつこりする。

四、取扱及練習

まづ一の取扱をして次に二の方の取扱にすゝむ。兩教材が大體終つたら二者の比較をさせて、その光景と氣分の全然異つてゐることに注意させなければならぬ。
練習としては語句の使用練習をするとよい、
鉛色の空が次第に氣持惡くたれ下つてくる。
どことなく、うなり聲がして獸の遠吠えのやうである。
雪の中を身をふるはせて一人の少女が行く。
もとより君の知つたことではありません。
すみきつた小川は底の魚もかぞへられる。
のどかに散つていく櫻の花。

# 第六、くりから谷

## 一、要旨

木曾冠者義仲が最初の功名戰としての栗殼谷の大活劇を描いて微細を極めてゐる。

此の文章を讀む事によつて源平時代に於ける大活劇の如何に悲壯を極めたものであつたかを想像させたい。尙之と共に漢字、「義(ヨシ)」「平家(ヘイケ)」「討手(ウツテ)」「騎(キ)」「敵(テキ)」「不(フ)」「後向(ウシロムキ)」「暗(クラ)さ」「深(フカ)い」「埋(ウ)まる」「命(イノチ)」等を知らせる。

## 二、指導方針

兒童は史實の說明に興味を持つこと限りないであらう。然し教授者はそれにつり込まれて文章を味はうことを等閑にしてはならない。

本卷には後に「弓流」及「萬壽姬」について源平の史實が載つてゐる。本課はその基礎知識を與へることが任務である。

## 三、教材研究

(1)「語句」

あわてゝ。びつくりしてうろたへること。





討手。うちての音便。征討の軍をいふ。

ときのこゑ。敵の中へ突貫していく時の勇しいかけ聲。

なだれうつて。雪崩のやうに。

命からゞ〳〵。やつと一命を助かつて。

(2)「文章」

不意を討たれた平家方は、上を下への大さわぎ……ずゐぶん深いくりから谷が平家の人馬で埋まりました。

平家の狼敗さが眼前に髣髴する樣である。

戰記文の脈を傳へてゐるものに、

「討手をさしむける」「暗さは暗し」「親が落ちれば其の子も落ち」「馬の上には人、人の上には馬」「かさなりかさなつて」いづれも文勢が急である。

## 四、教材取扱及練習

默讀から入つて文字語句の質問に應ずる。一通り讀めたら木曾義仲勃興の次第を補說してやる。次に文章の內容及語句の深究をすまして、文面を如實に想像させたら、平家物語の原文を讀みきかせるのもよい。練習として、

義家。義經。平野。平民。討平げ。攻討。五萬騎。騎兵。敵兵。敵中。不出來。不良。不向。横向。眞暗。暗闇。深井。深編笠。埋穴。生埋。命の親。命のつな。

「あわてゝ」「ひそかに」「どつと」「なだれをうつて」「命からゞ」等を使用させる。

參考。平家物語卷七の一章。

さる程に源平兩方陣を合す。陣のあはひ僅三町ばかりに寄せ合せたり。源氏も進まず、平家も進まず。やゝありて、源氏の方より精兵を募りて、十五騎橋の面に進ませ、十五騎が上矢の鏑を、只一度に平氏の陣へぞ射入れたる。平家も三十騎を出して、三十の鏑を射返す。源氏五十騎を出せば平家も五十騎を出し、百騎を出せば百騎を出す。兩方百騎づつ陣の面に進ませ、遂に勝負をせんとはやりけるを、源氏の方より制してわざ〳〵勝負をばせず。かやうにあしらひ、日を待ちくらし、夜に入りて、平家の大勢を後の倶利伽羅が谷へ追ひ落さんとたばかりけるを平家之をば夢にも知らず。共にあしらひ、日をまちくらすこそはかなけれ。さる程に、北南より廻し搦手の兵一萬余騎、くりからの堂の邊に廻りあひ、籠の方立打ちたゝき、鬨をどつとぞ作りける。各後ろ願み給へば、白旗雲の如くにさしあげたり。此山は四方巖石にてあるなれば、搦手よりは廻らじと思ひつるに、こは如何とぞ驚きける。さる程に大手より木曾殿一萬餘騎、鬨の聲を合せ給ふ。彌並山のすそ、杉長の柳原ぐみの木林に引き隱したりける一萬餘騎、日の宮林に控へたる今井の四郎六千餘騎も同じく鬨の聲をぞ合せける。前後四萬騎がなめく聲に、山も河も只一度に崩るゝとこそ聞えけれ。さる程に次第に闘うはなる。前後より敵は攻め來る。穢しや返せや〳〵といふ





族多かりけれ共、大勢の傾き立ちたるは、左右なう取りて返す事の難ければ、平家の大勢、後の倶利伽羅が谷へ我先にとぞ落ち行きける。先きに落したる者の見えれば、此谷の底にも道のあるにこそとて、親落せば子も落し兄が落せば弟も落し主落せば家の子郎等も續きけり。馬には人、人には馬、落ち重り〳〵さばかり深き谷一つを平家の勢七萬余騎にてぞ埋めたりける。

## 第七、霜

### 一、要旨

此の教材を通して、霜の朝の光景を想像させ、初冬の氣分を味はせると共に、花鳥に對する觀察力と之を描寫する筆致について鑑致させ、尙之と共に「霜」「菊」「元」「今朝」等の漢字についても知らせる。

### 二、教材研究

「語句」

赤み。少し赤いやうな色の添つてゐること。

うめもどき。冬青科に屬する木で、高さは一丈位。夏淡赤色の五瓣の小花を開く。冬に近づくにつれて實が熟して赤色に變る。南天の實より小さく、南天は綠葉中に赤きも、これは葉のない枝に實の

み群りついて居て赤い。

ひよどり。稗好より來る名。燕雀類中のひよどり科に屬する鳥で、形はつぐみに似て尾が長く脚は細い。背は蒼灰色で胸腹部は灰青色で黑斑がある。性質は機敏で飛翔が巧みである。氣嫌のよい活潑な飛翔に敏捷な鳥である。

(2)「文章」

霜の寒さの身に泌みて來るやうなビリツとした文章である。筆法が簡潔で複雜な光景を單純化してゐる。印象的な描寫。技巧といひ、洗練の程度をいひ子供の文ではない。かうした文を子供の作品に强いる必要はない。むしろ大人の作品として十分に鑑賞させるやうにしたい。

三、教材取扱

取扱としては、默讀通讀の後、その場面について、時、時期、場所、目に見えるもの、耳に聞えるもの、感覺にしみるもの、心にひゞくものといつたやうに暗示を與へて子供の想像中に場面を開展させていく。考へては讀ませ、讀ませては考へさせて作者の苦心の跡をさぐらせる。語句や內容についても精究し、子供の經驗とも結びつけていくやうにしたい。

練習として

霜がれ。霜ばしら。菊の花。菊水。元寇。元軍。元帥。





「まつ白」「赤み」「いつもより」「目立つ」「元氣な」「こんな寒い」「とびまはつて」等の文字語句を應用出來るまでに理解させる。

## 第八、虎と蟻

一、要旨

此の教材によつて小さなものでも多勢力を合せれば大敵も破ることが出來るといふ觀念を與へるのが主眼である。尙これと共に「弱い」「笑ふ」「程」「鼻」「食ひつき」等の文字をも知らせる。

二、指導方針

興味深い寓話である。大人でも子供でも讀んでみて面白い。滑稽なやうでしかも眞面目に考へさせる所が强い「人間があなた方を生けどりするには幾人かで力を合せるではありませんか。私どもだつて大勢してかゝればあなた方に負けません」これが一篇の寓意である。然しかうした寓意を教授者の說明によつて注入してはならぬ。どこまでも子供が此の文章を讀み了つた後に此の寓意を摑むことが出來るやうに指導したいものである。

三、教材研究

「語句」

生けどり。生きたまゝ捉へること。
ごまつぶ。黒く小さいものゝ比喩。胡麻は食用となる。黒くあぶら蟲の形をしてゐる。
あひづ。知らせ。
てつぺん。頂邊。頭の先端。
あやまつた。降參した。おわびした。

**四、教材取扱**

區分せずに通讀させる方がよい。通讀後は內容につき分節的に問答する。そして自然と寓意にふれさせる。それから讀ませたり話させたりして教授をすゝめる。練習としては、
弱蟲。氣弱。笑顏。笑ぶり。よ程。これ程。目鼻立。鼻高。食ひつく。食ひ物。

## 第九、町ノ朝

**一、要旨**

小都市の朝の明けゆく光景を想像させ、明るさの增すにつれて次第に複雜な活動に進んでいく狀態の描寫を鑑賞させ、すが〳〵しい朝の氣分にひたらせる。

**二、指導方針**





形式の簡易な所謂練習文である。田舍の兒童には少し手傳もいるけれども、町の子供であつたら、全く子供に渡し切りにして讀ませていつてよい。そして思ひ〳〵の感想を發表しあふのがよい。町の夜明の時間の立つにつれて次第に賑やかさが進展する樣は筆法の巧妙な所である。注意して鑑賞させる所であらう。

**三、教材研究**

ヒツソリ。靜まりかへつて物音のしない樣子。
其所此所。方々で。あつちこつちの意。
マツ先。一番先。
出アツタノハ。自分と行きあつたのは。
橋ノタモト。橋の端。
ダンナ。車夫又は商人の客をよぶ言葉。
白ンデ。白みて。白くなりそめる。
八百屋。野菜をうる店。
買出し。うけうりの品を問屋又は市場へ買ひ求にいくこと。
リン。鈴、ベル。

煮豆屋。豆を煮て料理したものをうる店又は人。

四、教材取扱

各自默讀通讀の後感想發表をさせ更に教授者と一緒に鑑賞を深める。

(1) 五時半頃……聞エルモノハ……鷄ノ聲　(2) ツヅイテ、牛乳配達、人力車。

(3) 明ルサノマスニツレテ見エルモノ、屋根ノ霜。　(4) 八百屋、魚屋ノ買出シ。

(5) 酒屋、呉服屋ノ店仕度　(6) 豆腐屋、煮豆屋ノ賣子ノ聲。

(7) 人ノ通リ次第ニ賑ヤカ、朝次第ニ明ルクナル。

此の夜明のすゝむ次第について、順序よく觀察を向けていつた作者の態度を、よく吟味させるやうにしたい。

練習としては、

外はひつそりとして彼方の森の上に月があるばかりだ。

ひつそりとして犬の聲さへ聞えない。

橋のたもとに人力車がとまつてゐる。

橋のたもとをこじきが歩いてゐる。

自動車は澤山の人の中をかけぬけていく。





太郎さんは運動會の徒歩競走に澤山の人をかけぬけた。

## 第十、弓流し

一、要旨

祖先一族の爲めに名を惜しむ武士道精神を傳へ、義經の死生を超越した武士氣質に感ぜしむると共に兒童をして高潔の情操を養はせるのが目的である。

二、指導方針

文章としては軍記物の常として中々趣味深いものだ。子供は屹度喜ぶであらう。

大體軍記物は地の文も對話も省略多く簡潔に引しまつてゐる所が特徴である。形式上に於て此の點を呑み込ませるやう指導しなくてはならない。源平の戰のことは以前にくりから谷あり低學年に牛若丸のことがあつた。此の教材は扇の的と同じ日の出來事として平家物語に記されてある所である。

三、教材研究

(1) 「文字」

太刀（タチ）惜し（ヲシ）何時（イツ）戰（タヽカヒ）

(2) 「語句」

小わき。脇に同じ。小は接頭語。片手の腋の下をいふ。

うつぶし。下向きになること。

潮「しほ」「うしほ」海水のことである。

熊手。昔の武器の一種、熊の手の爪の形をした爪を數個並べ長い柄をつけたもの。之を敵の「かぶと」や「しころ」に引つかけて寄せる。

かばひ。たすけまもること。庇護すること。

口々に。誰でも皆が。異口同音にいふこと。

太刀。小刀に對する大きな刀。古代は諸刃であつた。片刃の劍をカタナといつた。後には大なるを太刀（タチ）小なるを刀（カタナ）といつた。

たとひ。かりに。よしや。

名折。名の折れること。不名譽。不面目。顏よごし。

名を惜しむ心。體面を重んずる心。

(3)「事實內容」

內容の出所。平家物語卷十一。

判官八十余騎をぬきて兆をかけ給へば、平家の方には馬に乘りたる勢は少し。大略徒武者なりければ、馬に當





てられじとや思ひけん、しばしもたまらず引き退き、皆船にぞ乘りにける。櫂は算を散らしたるやうに、散々に蹴散らさる。源氏勝に乘りて、馬の太腹疲るゝ程に打入り〳〵攻め戰ふ。舟の中より熊手薙鎌をもち、判官の甲のしころにから〳〵と打ちかけ〳〵二三度しけれども味方の兵ども、太刀長刀の先にて、打ち拂ひ〳〵攻め戰ふ。

されども如何はし給ひたりけん。判官弓を取り落されぬ。うつぶし鞭をもちて搔き寄せ取らん〳〵とし給へば味方の兵共、只捨てさせ給へ〳〵と申しけれども、判官弓の惜しきにもとらばこそ、義經が弓といはゞ、二人しても張り、もしは三人しても張り、叔父爲朝などが弓のやうならば、わざとも落して取らすべし。延慶たる弓を敵の取り持ちて、是こそ源氏の大將軍九郎義經が弓よと嘲弄せられんが口惜しさに、命に替へて取りたるぞかしと宣へば皆又是をぞ感じける。

四、教材取扱

此の教材は區切つて取扱つては趣味を減殺する。一息に通讀させるやうにしたい。

教師朗讀、兒童各自の默讀、その間に讀めない文字や語句の質問をさせる。それから更に通讀、その後挿繪を參照しつゝ內容の問答をなし、適當の補說をしつゝ義經の氣持を味はせる。更に讀み又話させて文章の形式についてその簡潔にして而も趣味ある書き振りを鑑賞させるやうにしたい。

練習として、漢字及語句についてそれ〴〵書取らせるやうにしたい。

屋島の合戰。雪合戰。栗落し。力を落す。源氏の大將。源氏ほたる。捨子。ごみ捨。太刀山。太刀風。上陸。陸軍。取り代へる。代へ品。名を惜しむ。死を惜しむ。何時頃。何時もゝ々も。戰に勝つ

日本海の戰。

「小わき」「うつぶし」「かきよせ」「かばひ」「口々」

## 第十一、　入營した兄から

### 一、要　旨

書簡の形式をかりて兵營生活、兵種等に關する國民必須の知識を與へることを目的とした說明文とも見られるけれども、此の學年の子供には聊か無理な注文である。むしろ單純に兵營內の兄から弟へ送つた面白い手紙として取扱ひ理解の程度は必ずしも强ひない方針でいつたがよいと思ふ。

### 二、指導方針

此の教材は入營後間もない兄から來た趣味ある手紙として取扱ひ、兵營內の生活とか兵種とかいつた取扱は此の學年の子供には理解に困難であるから成可くあつさりと內容を取扱ふやうにしたらよいと思ふ。

作者である兄は勿論師團司令部所在地に居り、弟の千太はそこよりも北の方に當るよほど田舍に住んでゐることは想像される。

日附、署名、宛名の間隔、位置、字體などについて注意を與へるやうにしたい。





### 三、教材研究

(1)「文字」

入營（ニフエイ）外出（グワイシユツ）昨日（キノフ）兵（ヘイ）砲（ハウ）下村（シモムラ）

(2)「語句」

初雪。冬になつて初めて降つた雪。

分家。本家に對して分家といふ。この手紙の主人公は本家に生れた人である。

ひよつとする。斷言は出來ないけれども、或はなるかも知れない。何んだかそんな氣がする。

人一倍。他の人の二倍だけの意味。

(ゆ)「事實內容」

歩兵。徒歩で戰爭に從事する兵種。又之に屬する軍人。

騎兵。騎馬で戰爭に從事する兵種。

砲兵。火砲を運用して戰爭に從事する兵種。

工兵。城塞橋梁の築造架設其他軍事上の土木建築の事にあたる兵種。

輜重兵。輜重運搬監視に任ずる兵種。輜重といふのは軍隊の荷物を運搬する事の稱である。それから轉じて彈藥、糧食、被服其他の諸材料等一切の軍需品の總稱となつた。輜重輸卒は重輜兵に從

屬して輜重の運搬に從事する兵卒である。

**四、教材取扱**

先づ通讀させる。文字及語句を質問によつて知らせ、次に內容について文の順序を追ふて問答して大體の意味をさとらせる。

一通りの教授がすんだなら之を書取らせてみる。日附、名書、拿稔などについて手紙の作法の一通りを授ける。

練習としては

洋服。日本服。入營兵士。入營日。入學後。雨後。出水。出金。出兵。昨年。昨夜。步兵。砲兵。牛舍。寄宿舍。各國。各校。大隊。中隊。何倍。倍數。

「ひよつとすると」「初雪」「人一倍」等の語句を使用して短文を構成してみるのもよい。

## 第十二、笑ひ話

**一、要旨**

二つとも輕い滑稽味のなかに一種の機智ともいふべきものを味はせることを主眼として居る。

**二、指導方針**





(一)は狂言に類し(二)は落語である。輕口なをかし味を味ふべきである。更に詳かに見れば、前者は考へが奇拔で自然的な滑稽味である。

裏面へ廻ると、理論と實際とは一致し難いものだといふ暗示と諷刺とを持つてゐる。

「なぞ程理窟はさうだ」といふ一句にいひ知れぬ何物かゞある。然し之も說明になつては興味が減殺される。子供の理解にまかせておくやうにしたい。(二)は所謂口あひである。落語の妙味である。人を笑はせようといふ野心から出來たもので不自然な嫌味を免れ得ない。

「月日の立つのは早い」といふ世俗の言葉を述懷として「自分は夕立にしよう」と夕立の語源をそのまゝ用ひてある可笑味である。

**三、教材研究**

「語句」

夕立。夏の夕方近くなつて俄に降つて來る雨で驟雨、白雨などゝもいふ。夕立には雷がつさものである。

**四、練習**

取扱としては讀んでゐるうちに自然と可笑味を感得すれば足りるのである。理解の程度により早い方の子供にその理由を發表させてみてもよろしい。練習としては漢字の書取をさせるとよい。

歩き方が下手だ。十里でも歩ける。浮いたり沈んだり。船が沈む。理くつ。理科。雷様。雷門。同じ仲間。同じ町。

## 第十三、　鮭

**一、要　旨**

鮭の一生についての生態習性を面白く知らせようといふのが一篇の主眼である。

**二、指導方針**

理科的教材を理科的に説明しないで、備忘録の形にした所が此の文の特質である。一篇は趣味ある筆致で貫かれてゐる。理窟張つた取扱を避けるやうにしたい。

鮭の實物と鮭の卵とを用意しておくがよい。

鮭の親子漬としてなら手に入れ易い。尙鮭が川を上つてゐる所の繪をも用意しておきたい。

「句語」

鮭。喉鰾類中のさけ科に屬する魚、河海の間に生息する。秋冬の交に、自分の生れた河に溯つて卵を産む。鱗が細く、肉は淡紅色で脂が多い。味は厚美といふ可きである。東北地方や北海道、樺太に産する。卵を「すぢこ」といふ。





小豆。知らぬものもなからうが都會兒童には知らせる要もあらう。荳科に屬する栽培草本。種子は通常帶赤色で稀に白色のものもある。食用としたり洗粉の原料とする。

里歸。お嫁や養子に行つた人が、自分の實家へかへつて來ることをいふ。

「文段內容」

(1) 發端　(2) 鮭の生涯の概說

(3) 鮭が川を上つて來ること　(4) 鮭の産卵について

(5) 鮭の里歸　(6) 鮭の産地。

**四、教材取扱**

默讀によつて內容や場面を想像させる。一通り讀めたら數名に讀ませ不審の點を質問させる。教師の補說も加へる。

文章の取扱になつて、まづ冒頭の

「叔父サンニ鮭ノ話ヲ聞イタカラ忘レナイ中ニ書イテ置カウ」

あくまで子供の備忘錄の形にして理窟をさけ趣味的の筆致を以てした所を味はせる。

文章として面白いところは中々多い。

「鮭ハ海ノ魚デモアレバ川ノ魚デモアル。」

「頭ヤ尾デ穴ヲ堀ツテ其ノ中ヘ卵ヲ產ム。」

「外ノ魚ガ其所ヘ來ナイヤウニシバラク其ノアタリニ番ヲスル。」

「之ヲ鮭ノ里歸トデモ言ツタラヨカラウ。」

單なる說明文の味はひ得ぬ所である。

五、練　習

しほ鮭。生鮭。魚店。干魚。淺川。淺草。穴倉。むろ穴。米粒。麥粒。來島。來ない。我校。

我家。產地。產物。

夜中から朝方にかけて霜が下りる。

川をさかのぼつていく舟が見える。

さら〳〵と木葉をゆする風の音。

つかれてそのまゝ寢入つてしまつた。

今日はお姉さんが里歸なさるはずだ。

私の村のおもな產物は米と柿である。





# 第十四、冬の夜

一、要　旨

樂しい山家の冬の夜のまどゐを想像させて其の氣分を味はせるのが主眼である。

二、指導方針

挿繪と對照しつゝ文章の面白味を味はひ、その場面の想像を遺憾のないまでに指導したい。文語としての形式は是が始めてゞある。文法、文格等口語と異なつてゐる所を比較するやうにするとよい。それには最初通讀を徹底的に行ひ、殆んど暗誦されるやうにしておいて、口語と其の異る點を考察させるやうにしたいものである。

三、教材研究

(1)「語句」

衣（キヌ）　着物のこと。

居ならぶ。　坐つて並んでをる。

折りつゝ。　折りながら。

とろ〳〵。　勢のさびしくなつて弱目になつたこと。

吹雪。　雪がまじつて烈しく風の吹き亂れること。
ゐろり。　圍爐裏、單に爐といふに同じ。
すぎし。　すぎた。
手がら。　功名。勳功。
耳をかたむけ。　注意してよく聽くことの形容である。

**四、教材取扱**

題材も行文の調子もなか〳〵面白い。冬の山家の夜のまどゐ。母は縫物をしながらお正月のお話をし、父は繩をなひながら昔の手柄話をする。爐の火はとろ〳〵と燃え、外はすさまじい吹雪である。しかし一家中には睦じい平和の氣がたゞよつてゐる。

まづ讀ませて見る。挿繪と引き合せつゝ補說によつて場面を想像させ、文章の味はひと實景の想像とを十分ならしめる。

之を單簡なる口語譯にしてみる。

ともし火の近くで衣をぬつてゐる母は、春の遊びの樂しさを語つてゐる。

そこに並んでゐる子どもらは指を折りながら日數をかぞへて喜び勇んでゐる。

ゐろりの火はとろ〳〵ともえて、外では吹雪の音が烈しい。





ゐろりのはたで繩をなつてゐる父は、

すぎ去つた昔の戰功を語つてゐる。

そこに並んで居る子供等は眠さを忘れて、耳をかたむけながらこぶしをにぎつて聞いてゐる。

ゐろりの火はとろ〳〵ともえ立ち、外では

吹雪の音が烈しく聞えて來る。

此の程度で大體呑込めることだらうと思ふ。

## 第十五、萬じゆ姫

**一、要　旨**

一讀涙を催させる哀れにも美しい此の物語によつて、健氣にも優しい孝心深い萬壽の姫の心意氣に感じさせるやうに指導したい。

**二、指導方針**

十五頁に亘る本卷隨一の長篇であるが、新出や讀替の漢字もないから、主として內容の玩味に精進させるやうに指導していけばよい。

但し形式としても文章の着想や構想に苦心してゐるから、其の點にも注意を怠らないやうにしたい。

書出しの邊も文章構想上の技巧として話が前後してゐるから、その關係連絡の前後を了解させる必要がある。

内容としては、孝子の至誠が神に通じ、人を動かしたといふ所が眼目である。天下の大將軍頼朝公の顏色を冒して幽閉罪人の身代りになりたいと決心した少女の心、母子が何年ぶりかで巡り合つた時の恩愛の涙、讀んだだけでさへ涙なしには居られぬ。教授者の手腕如何によつては兒童の心底に多大のよき影響を及ぼすにちがひない。

歴史的基礎知識としては頼朝の當時に於ける位置や權勢、義仲との關係の大略を呑み込ませて置きたい。

三、教材研究

(1)「語句」

奉納。　神前に物品を奉獻すること。こゝでは神前に舞をして神意を慰め奉らうといふ意。

十二人いる。　いるは入用の意。

日本一の出來。　當時武人の常用語。非常に立派な出來ばえに對していふことである。

のぞみにまかせて取らせるであらう。　褒美はお前の望むものをやらう。

かはるも道理。　顏色の變るのも尤もな道理がある。





之をさとつて。　頼朝が義仲を攻める謀を知つて。

風のたよりに。　このうわさを聞きつけて。

うば。　乳母。幼兒に乳を與へるための母。

かけひなたなく。　表裏のないこと。

力をおとして。　がつかりして。

下仕。「したづかひ」「しもづかひ」の方よし。下廻りの召使。身分の低い召使のこと。

人少。ひとすくな。御殿の中に留守居する人が少くなつたといふ意味。

とびら。　扉。戸のことである。

心を合せて。　しめしあはせて。一緒に相談して。

もらひ泣き。　同情して他人の事で涙をこぼすこと。

もろとも。　一緒になつて。

居合はせた。　その場に居た人々。

(2)「文章」

第一段。萬壽姫が舞姫の一人となつたこと。(姫の美貌を想像させるやうにしたい。)

第二段。舞の面白さに頼朝も一緒に舞つたこと。(姫の舞が如何に美しかつたかを想像させたい。)

第三段。此の物語の骨子。姫の麥美として唐糸の身代りを望んだこと。（頼朝の書きを知らしむ可きである。）

第四段。此の物語の發端。光盛の娘が間者となつた所。（頼朝と義仲との關係を知らせる。）

第五段。光盛の娘が入牢させられたこと。（唐糸の名こゝに始めて現はる。頼朝の怒りを知らせる。）

第六段。萬壽姫の鎌倉下向。（途中の難儀を偲ばせる。）

第七段。萬壽姫が頼朝の屋敷へ住み込んだこと。かけひなたなく働いたこと。

第八段。萬壽姫母の在所を探せども不明。（失望の有樣を偲ばせる。）

第九段。母の在所わかる。（萬壽の喜びの樣を知らせる。）

第十段。母子の秘密對面。（ほろりとなる。）

第十一段。物語の轉廻。書出しの所と連絡つく。）

第十二段。孝心の至誠神に感ず。母の一命助かる。

第十三段。母子の喜び、手を取り合つて故郷へかへるところ。

**四、教材取扱**

通讀二三遍、文の内容と氣分とを大體頭に入れ置き、分節的に讀ませつゝ、質問によつて語句を取扱ふ。





語句の取扱がすんだなら各段毎に讀後の感想を發表させるやうにする。

語句の練習は時間の具合と子供の狀況とによつて適宜の處置をすればよい。

## 第十六、磁石

**一、要旨**

此の文章を讀ませて磁石が鐵を引く不思議な力を持つてゐるといふことを、歸納的に知らせるのが主眼である。

**二、指導方針**

此の教材は理科的のものではあるが、磁石は鐵を引く力があるものだといふこと、不思議なものであるといふことを知らせればそれで足りる。兒童が此の文を讀んで行く中に自分も年玉に磁石を貰つたんだといふ氣になるやうに、又此の兄弟の動作に注意して行く中に自然と歸納的に磁石の性質を知るやうにすればよい。磁石が何ぜ鐵を引くかといふやうな物理的知識や、又は鑛物學的知識を注入する必要はない。只不思議な力を持つてゐるといふことだけでよい。大體此の文章は少し纏まり過ぎた嫌ひがある。もつと磁石の性質と關係のないことも子供の生活として附隨してもよいのであるが是れは餘りに大人式にいひたいことだけをさつさといひこなしてゐる。然しかうしたことが子供に氣附な

ければ、そのまゝにしておいてもよい。

三、教材研究

(1)「文字」

磁石（ジシャク）　灰（ハヒ）　鉢（ハチ）

果して（ハタシテ）　殘らず（ノコラズ）

(2)「語句」

オ年玉。　新年の祝儀の贈物である。

ヒツクリカヘシ。　くつがへす。

灰ダラケ。　ダラケは接尾語。灰まみれ。

果シテ。人の言ふごとく。案の如く。

其ノ上。おまけに。

(3)「文章の作者」

町の叔父さんといふから此の作者は田舍の少年に相違ない。兄や弟といふから仲兄の位置にある譯だ。讀者と同年輩、磁石の不思議な力について既に知り好奇心の爲にやつてみたもの。

(4)「事實內容」





磁石とは元、磁鐵鑛の名に用ひた。之を天然磁石といふ。鐵鑛の一種で鐵黑色で堅いけれども脆い。磁氣を有つてゐて鐵類を吸引する特性があるから、天然に產出するものも他の類似の鑛物より容易に識別することが出來る。之は製鐵上重要な鑛物である。又鐵やニッケル等を吸引する性質あるものゝ總稱として用ひることもある。本課では馬蹄形の磁石を挿繪に載せてあるからこの意味の磁石である。その他磁石盤卽羅針盤の略言として之を用ひることもある。

四、教材取扱

默讀の後文字や語句をあつさりと取扱ひ次に內容について深究的に問答する。磁石及磁針について質問があつたら一通りの取扱のすんだ後に簡單に取扱ふやうにする。

磁石。磁針。火鉢。すり鉢。灰かぐら。灰だらけ。果して大雨となつた。殘物。居殘り。お年玉。ひつくりかへして。かきまはし。果して。殘らず。其の上。等の語句の書取をする。

## 第十七、　けんやくと義捐

一、要　旨

儉約と吝嗇との區別を悟らせ、又儉約の結果が義捐となつて始めて意義のあることを、此の文中の主人の行爲を深く考察することによつて兒童に感得させるのが主眼である。

二、指導方針

儉約と吝嗇とは混同視され易く、儉約家はやゝもすれば吝嗇に陷るものである。吝嗇を卑む結果儉約をも卑しむやうになり勝ちなのはかうした譯によるものである。共に誤れるものである。文章の主人公は確かに儉約家である。然し吝嗇ではなかつた。博愛の情があつて、義の爲めには幾何の喜捨も惜しみはしなかつた。

儉約の結果は義捐となつて有効に使用されてゐる敬すべくも又尙ぶ可き人格である。

「こまかな人だが出す時には出すね」

といふ所は文章の骨子で、此の思想を感得させるやうに指導していかなければならぬ。

三、教材研究

(1) 「文字」

義捐（ギエン）主人（シユジン）

(2) 「語句」

儉約。　物を猥りに使ひ粗末にしないこと。

義捐。　貧困又は厄災に陷つた者に同情して金品を喜捨すること。

ほとんど。　八九分通。まるつきり。





丸やけ。　殘りのない程燒けること。

見かねて。　同情に堪へないで。

つのり。　募集すること。贊成して賞つて申込を受けること。

さゝやき合ふ。　小聲でひそ〳〵と語し合ふこと。

こまかな人だ。　儉約家とか吝嗇家といふ意味。

お氣の毒。　非常に同情すること。

こまかな人だが。　こゝでは物事は些細のものでも粗末にせぬ儉約家ではあるがの意。

四、教材取扱

此の文章も區分しないで一氣に讀破させるとよい。區分したのでは全篇を通じての深い意味はつかまれない。

默讀の後大意を捉ませて各自に發表せしめ、次に通讀しつゝ文字及語句の意味を授けていく。讀後の感として此の主人の性格、平素の信念について問答し儉約と義捐が如何に大切なものであるかを悟らせる。又青年が吝嗇と儉約に對して是まで持つてゐた觀念についても考察させるやうにする。教授者の附燒及的教訓や說明は却つて興味を減殺するものである。

練習に入つたら類字、類語の蒐集や語句使用の練習を行ふやうにしたい。

青年會。青色。義捐金。義金。忠義。義人。主人。主君。粢麿。粢俵。豆飯。豆菓子。分前。半分。歸途。途中。全く。

次の語は語句使用として練習させたい。

「ほとんど」「見かねて」「義捐金」「つのり」「さゝやきあつて」「こまかな」「全くだ」「それはお氣の毒だ」

尙讀み方や話し方としても十分に練習させたい。

## 第十八、賀茂川

### 一、要旨

賀茂川を中心として、過去一千年間我國帝都として波瀾重疊の史實を有する京都の名所古跡について、懷古の情を起さしむるといふのが一篇の主眼である。

### 二、指導方針

此の教材は平安朝文學史の背景をなしてゐる京都について學ぶ有力な基礎的智識である。

歷史的教材であつてしかも地理的教材であり、文學的色彩も濃厚なものであるから、種々の方面に於て留意して取扱はなければならぬ。





そして之等について實際感銘深くする爲には次のやうな教材を準備して置かなければならない。平安朝時代男女裝束、牛車、武家の具足等の繪畫。東寺、清水寺、智恩院、金閣寺、五條大橋等の繪ハガキ若くは寫眞、友禪の標本等。

### 三、教材研究

(1) 「文字」

川原（カハラ）

(2) 「語句」

川原。川邊の水なくして砂礫の多い所。

太刀をはいた。「はいた」は帶（ハ）くことで刀を帶びること。腰につけること。

おくげ樣。（一）朝家の意で主上、皇族又は朝庭のこと（二）公家衆の略。中古武家が起つてから區別する爲めに直に公家に仕へる臣を公家衆といつた。堂上家ともいふ。

牛車（ギツシヤ）本課では（ウシグルマ）と讀ませる。屋形車に牛をつけて牽かせるもので官位門地などに依つて乘用や製作に色々の制限がある。

なり。形。爲り狀。物の外見。姿。

なぎなた。薙刀。刄の幅廣く長く反つて長柄のある武器。薙ぎ拂ふに用ひる。

とうの昔。　ずつと〳〵の昔。
きえました。　時去り人逝いてあとかたもないといふ意。
すそ。　麓の意。
至つて。　至極。最もの意。非常に。
染物にむいてゐます。　染物するに都合よい。
川べり。　川縁。川の沿岸。

(3)「文章」

題材も文章も、すらりとしてゐて何より嬉しい。

「こんな人、こんな姿は、とうの昔にきえましたが、川は昔のまゝに清く流れてゐます」

此の文章の生命ともいふべきところである。

「青い松の間に五重の塔や大きな寺の屋根が見えます」京都の特色ともいふべきものであらう。

「京都は長い間の都ですから、冠をかぶつて太刀をはいたおくけ様方や、きれいな着物を着て牛車に乘つたお姫様方の姿を此の川の水は幾度となくうつしたことでございませう」

全くさうだ。そして此の川でなくては見られなかつたのだ。まるで美しい繪卷物となつて幾度も幾度も繰りひろげられたであらう。





「今三條の大橋に立つて川下を見ると致しませう」

以下は現在の賀茂川の有様で地理的分子が多分にある。

文章は大體三段に分れてゐる。

1　主として往古の京都。　　2　主として現在の京都。
3　水の綺麗なこと。

(4)「事實內容」

賀茂川は愛宕郡を貫流す。水源は一は雲畑村岩屋、他は鞍馬村の山中に出で、相合して南に流れ、上賀茂社の西を過ぎ、下賀茂の南糺河原に至つて高野川を入れ、京都の東偏を流れて紀伊郡下鳥羽村に至つて桂川に合する。凡七里、末は淀川に注ぎ攝津の國に入る。京都にては洛水と曰ふ。又堰川の名あり。瀨見の小川ともいふ。

友禪染。

單に友禪ともいふ。京都祇園町の畫工、梅丸友禪が工夫に出たものといふ。地質の緻密なる絹布に種々染料を用ひて人花鳥などの込入つた模様を鮮明に染め出す。染料を糊に混じて型紙を置いて張つてある絹布の上に模様を塗り出す。之を釜で蒸して地質に染料を染め込ませた上、賀茂川の水で洗ひ落すのであるが、他の水よりこの川の水が一段と鮮麗の色を出させるので名高い。

四、教材取扱

最初に全教材について教師が朗讀し、次から三段に分ち順々と取扱をすゝめて行き、最後に總括して全篇の取扱をするとよい。

各段に於て通讀しながら、子供の疑問に答へ、小供の感想を深刻豐富にし、更に教師の補説、繪畫寫眞等の參考資料の提供によつて吟味研究をすゝめていくとよい。

練習に入つては例により類字類語の蒐集及語句の使用をなさしめる。

姫松。姫百合。後姿。姿見。武士。武士道。清水。かけ清。致し方。川原柳。川原よもぎ。京染。紺染。染色。染方。

「はいた」「いくたびとなく」「なり」「とうの昔」「昔のまゝに」「すきまもなく」「こみあつて」「霞んで」「いたつて」「川べり」

## 第十九、メリンス

一、要旨

メリンスといふ題で種々の織物の地質材料及びメリンスの毛織物であること及びその模樣の染め出し方についての知識を與へるのが目的である。





二、指導方針

練習教材である。趣味のない材料であるが、會話の體ですゝんでゐる所はせめてもの氣安さを覺えさせる。然し女子にとつては案外興味があるかも知れない。机上の説明だけではなく是非地質の標本を用意して置いて直觀させるやうにしたい。

三、教材研究

(1)「語句」

地。(チ)ぢあひ。おりぢ。

カタ。部分々々の模樣を色わけにして厚紙に小刀で彫刻し透かしにし、これを地にあて、糊に混じた染料を塗るのである。何枚も何枚も用ひて、はじめて完全な模樣となる。たとへば圓は三枚位をもちひてはじめて完圓となるやうなもの。其の他色によつて型紙の違ふことは前述の通りである。

ラシヤ。羅沙。西洋傳來の毛織物で、羊毛の精選したものを厚く密に織つて種々の色に染めたもの。多くは洋服外套に用ひる。

フランネル。(小絨)西洋から舶來した毛織物。地質が薄くて柔かい。肌着、日本服とし袷時期に着る。略してネルといふ。綿ネルが出來てから毛織の方を本ネルといふ。

セル。　毛織で地が薄くて主として夏着に仕立てる。洋服にも和服にもする。

メリンス。　薄く軟かい毛織。モスリンともいふ。一名唐縮緬ともいふ。近來綿絲で織つて之にまがへたものが出來て之を「綿モス」ともいふ。

**四、教材取扱**

文章は練習教材であるから、區分しないで一氣に通讀させたい。讀後は何のことが書いてあるかを摑ませる。それを發表させ整理しつゝ讀んでいくやうにしたい。

一通り取扱が終つたら姉妹に分けて讀ませ又話させてみるのも面白からう。

## 第二十、氷すべり

**一、要旨**

結氷地方に於ける氷すべりの狀況を想像し氷すべりの面白さを味はせる。

**二、指導方針**

地方的の教材である。信州、東北、北海道など氷滑の行はれる地方の子供には分り易いけれども、關西地方から西方の子供には經驗のないこと故理解に困難であらう。文章が幸ひ描寫的筆致で書かれてあるし挿繪も面白く出來てゐるから、それらによつて想像するより外はない。





教師の經驗談でも出來るとすれば殊更よい。

**三、教材研究**

(1)「文字」

氷（コホリ）西洋人（セイヨウジン）曲（キヨク）

(2)「語句」

氷靴。　スケート靴、氷の上を辷るための鐵製の臺をつけた靴。

おそろしいほど。　見て居ても恐しい感じのする程に。

手にすがつて。　手につかまつて。

こはゞ〳〵。　恐る〳〵。こはさうにして。

曲すべり。　平常の辷り方以外に變な奇拔な姿勢で辷るもの。例へば片足をあげ、後向き、千鳥辷り、蟹辷り、二人三脚等あり。

**四、教材取扱**

文章は無論區分しようがない。そのまゝ全部を提供する。挿繪と對照しつゝ讀ませ、時に教師の經驗談を挿入して想像の境地に入らせる。

經驗のある子供にはそれ〴〵の感想を話させる。讀み方に熟れたら語句の取扱を一層深めていくや

うに取扱ひたい。

練習としては類字類語の蒐集及語の使用練習をするやうにしたい。

湖の上。湖の舟。氷水。氷枕。西洋。西方。靴べら。靴ひも。片手。片目。曲乘。曲馬。

おまけに。思ひ〳〵。すべる〳〵。恐ろしい程。こは〳〵。…てばかり。

## 第二十一、神風

### 一、要旨

六百年以前博多沖で演ぜられた元寇の活劇を想像せしめ、金甌無缺の國體を知らせると共に、我等の祖先は一旦緩急あるに際して擧國一致、愛國勇武の國民であつたことを知らしめる。

### 二、指導方針

伊勢の神風聞くだけでも氣持がよい。十萬の元軍みな海底の藻屑となるといふ痛快極まる教材。此の文の起筆は元軍の博多に押寄せたところからであるが、基礎知識としては、時宗が元の國書の無禮を怒つて使を斬つた事や、九州四國の武士の奮戰のことや、元國の野心といつたやうなことについて大略說話する必要がある。

古來我國民の熾烈なる愛國心は一旦國難に當るや爆發して上下一致外敵を征服し得る不思議な力を





持つ。之天祐も力あることながら、やはり國民の愛國心の發露の結果であることを深く印象せしめるやうに取扱はなくてはならぬ。

### 三、教材研究

(1)「文字」

九州（キユウシユウ）石垣（イシガキ）屈セズ（クツセズ）大難（ダイナン）上皇（ジヤウクワウ）必死（ヒツシ）暴風雨（バウフウウ）

(2)「語句」

見渡すかぎり。　目のとゞくかぎり。見たる所はすべて。

おほはれた。　一ぱいである。そればかりである。

意氣ごみ。　かくご。

少しも屈せず。　少しもひるまないで。

ひやうらう。　兵糧。兵隊の食べ物。

國難。　國の大事。國の存亡に關する大事變。

おぼしめし。　思召し。御心。

海はわきかへつた。　海が荒れて大波が起つた。

(3) 「文章」

第一段。元軍が博多へ襲來した。（十何萬の元軍が突如として襲來した）

第二段。我軍の意氣込み。（濱邊に築く石垣、名高い防備の石壘。）

第三段。我軍の攻擊。（我武士の攻擊的精神の凄さ）

第四段。河野通有の奮戰。（左肩を射られても屈せぬ通有の武勇）

第五段。敵の假退却。（一段と猛しい襲來が豫想さる）

第六段。龜山上皇の御心配。（一身を以て國難に代らせ給はんのかしこさ）

第七段。神風一陣、元軍十萬海底の藻屑となる。（神靈の加護眞に身にしむ）

第八段。結尾。（金甌無缺の國柄の貴さが偲ばれる）

四、教材取扱

教材は分節的に讀ませ、話させ、更に補說を加へ、想像を豐かにし、興味を盛にして進む。練習として次の熟語を書取らせ又語句の使用練習をさせるとよいと思ふ。

九十。九錢。九牛の一毛。上州。信州。生垣。垣根。國を守る。敎を守る。攻めよせ。攻め取る。次男。次女。山の如き。海の如き。射あてる。射殺す。あま味。味そ。不屈、屈指。明らか。皇國。皇居。必要品。暴行。暴徒。强風。風邪。雨天。晴雨。人數。數へ方。十萬餘。餘興。餘けい。





見渡すかぎり。意氣ごみ。待ちきれず。少しも氣にしなかつた。如きは。ばた〳〵。一先づ。おぼしめし。こつぱみぢん。

## 第二十二、　象

一、要　旨

象の生態、習性等の理科的知識を授けるのが一篇の主旨である。

二、指導方針

理科教材の說明文であるが、肩の凝らない趣味の深い書きぶりである。國語教材として織り込む可き知的教材の說明はかくありたいものである。教授者は折角かうした面白い題材のものを無趣味な乾燥な取扱にしないやう心掛けなければならない。

三、教材研究

(1) 「文字」

象（ザウ）丈（ヂヤウ）自由（ジイウ）牙（キバ）一切（イツサイ）繪（エ）口上（コウジャウ）桶（ヲケ）守（モリ）

(2) 「語句」

箕。竹の皮や櫻の皮などを編み交ぜたもので、上から見ると楕圓形を半切したやうな形で穀物類を入れて、あふぐやうに振ると、中にある塵のやうな輕いものは吹き飛ばされてしまふので穀物を精選する道具として用ひられる。

一切　すべて。悉く。みんな。

口上。仕業の前の挨拶。又は說明。

ごばん。碁盤。

しやがんだ。手足をちゞめ首をちゞめ腰をかゞめて小さくなつた形のこと。

喝采。ほめはやすこと。

氣立。心立。性質。

いたつて。大そう。非常に。

ふき出した。笑つた。

(3)「事實內容」

象。哺乳類中の長鼻類に屬する獸で、體軀の巨大なることは現在陸棲動物中では隨一である。毎肢に五趾を具へ眼は小さく細い。鼻は圓筒狀に延びて長く、屈伸自在なことは恰も人類の手、指のやうである。二萬餘箇の筋肉から成つて居るといふ。上顎の二本の門齒は異常に發達して長く、





俗に象牙といふ。現在此の世界に棲息してゐるものは印度種と亞弗利加種との二つである。力最も強く性質は怜悧で溫順である。

四、練　習

象牙。象山。二丈。丈餘。理由。自由。犬の牙。象の牙。一切。繪本。繪はがき。口上。口中。桶屋。みそ桶。腕くらべ。腕押し。子守。はか守。印ばん。印形。腹かけ。くだり腹。顏立。朝顏。誰人、誰彼。

先づ。一切。口上。まき上げる。ぬつと。しやがんだ。かつさい。どさり〳〵。ぶら〳〵。氣立。いたつて。

## 第二十三、千早城

一、要　旨

金剛山千早城に於ける正成の善戰苦戰の實況を想像させて、正成の知略の拔軍であること、而して忠勇絕倫ともいふべき人格に感銘させたい。

二、指導方針

楠公正成について知らせたいことが中々多い。忠節辛苦よく賊を破つたこと。智謀絕倫强敵を腦ま

したこと。本課はその後の方を主としてゐる。僅かに千人の兵を以て黒子の如き孤城により、百萬の賊軍を苦しめたといふ點を感嘆せしむるにある。そして賊の大軍が此の小城を攻めあぐんでゐる間に諸國の忠臣四方に起り、官軍の勢ひ日に加はり建武の中興を實現し得たといふ點に忠勇の一端が現はされてゐる。此れを端緒として正成の生涯を知らしめ、遂に忠誠國に殉じたことを補說するやうにすればよい。

三、教材研究

(1)「文字」

千早城（チハヤジヤウ）投落し（ナゲオトシ）惡口（アクコウ）聲（コエ）餘すな（アマスナ）我先（ワレサキ）死傷（シシヤウ）

(2)「語句」

けはしい。　勾配が急で登るに困難なこと。

やぐら。　物見臺のこと。

これにこりて。　こり〳〵して。怖氣づいて。

水をたやして。　水をなくしてしまつて。

ひやうらう攻。　糧食の通路を絶つて城兵を飢餓に迫らしむること。





一騎も餘すな。　みな殺しにせよ。

さつと。　すばやく。敏捷に。

はかられた。　だまされた。

しやにむに。　どんなことをしても。どんな無理をしても。

我先に。　先を爭ふ形。

持て餘す。手に餘すこと。仕樣のないこと。

ひやうらう道。　兵糧を運ぶ道。

殘少。　のこりすくなと讀む。殘部の乏しいこと。

(3)「事實內容」

太平記卷七、千劍破城軍の事を參照せよ。

日本外史は千篇城軍のところを參照せよ。

四、教材取扱

教材は最初概括的に教授者が朗讀するか、又は豫備的談話を試みるかして、然る後に分節して取扱をすゝめるやうにするとよい。一通りの取扱のすんだ時に更に一纏めとして取扱ふやうにする。教材の分節は大體次の通りでよからう。

1、九十一頁の末まで。　2、九十四頁の五行まで。
3、九十五頁の六行まで。　4、九十七頁の始行まで。
5、終りまで。

練習としては漢字の書取を十二分に行ひ、更に類語や熟語を工夫させ、又次の語句を使用によりて練習させるとよい。

けはしい。わづかばかり。やぐら。こりて。うばつて。惡口。くやしがつて。さつと。はかられる。しやにむに。もてあまし。殘少。

## 第二十四、記念の木

### 一、要旨

戰死した愛兒が、生前小學校在學時代に植ゑて置いた思ひ出の記念木、それを回顧する父、いかばかり感慨深いことであらう。此の文章をしみ〴〵と讀み、歌ひ且つ味はつて作者である老爺の眞情をくませ、惠み深い親心の切なるものを敎へるのが主眼である。

### 二、指導方針

新出文字も讀替もない。語句としても平易なものが多く、形式としても口語詩であるから練習敎材と





考へて取扱つてよからう。

子を思ふ親心の至情といつたやうなところを追懷の情味深い歌のうちから掬みとらせるやうに指導していけばよい。死の追想はいたましいほどのものである。ましてや戰死となつては一層感慨深いものがあらう。その境地を一本の落葉松に言寄せて叙べてある所に讀者として鑑賞すべきものがある。

### 三、教材研究

(1)「語句」

けんくわん（玄關）　正面入口。學校なれば主として職員の出入口。

とうに。　疾くにの音便。昔に。早い以前に。

(2)「事實內容」

落葉松。　松杉科に屬する落葉木で山中に自生する。葉は針狀叢出して柔軟である。花は單性雌雄同株で、葇荑狀をなしてゐる。木材は種々の用に供し、又觀賞用としても栽培する。奥羽地方に多い。カラマツ。テウセンマツともいふ。

(3)「文段」

イ　學校の落葉松を見て戰死した子を思ひ出す。……わたしの子どもが植ゑたので、其の子はとうに戰死した。

ロ　學校新築の時にあの子が植ゑたこと。

……うちの畠にあつたのを、

死んだあの子が掘取つて、……

ハ　其の時の子の年と落葉松のたけ。今の樣子……あの子は十二、落葉松は、あの子のせいより低かつた。それが今では學校の二階の窓にとゞいてる。然しその我兒は此の世には居ない。……

ニ　出征の時、子の殘していつた言葉、……學校の前でふりかへり、わたしの植えた落葉松が

ホ　校長のいつたこと。

はじめて聞いた記念の木、大事にするとおつしやつた。これで老爺もほつと安心したであらう。

**四、教材取扱**

新出文字も難語句もなく極めて平易な口語詩であるから、成る可く子供に與へてよく讀ませてみるがよい。一通り讀んだ所を問答して一篇の筋をたしかめて置くとよい。

次に又心を落ちつけて、しんみりと讀みひたらせて各場面について十分に想像させる。教師の補說のいりさうな所は行ふ。かうして一通りの取扱がすんだなら、讀後の感を、兒童各自の好む形式にて發表させるやうにすると面白からう。





# 第二十五、芽

**一、要旨**

一雨々々に暖かさを增し、萬物伸びゆく中に、早くも草木の芽も現はれるといふ春先きの感じを味はしめるのが主眼である。

**二、指導方針**

新味豐かな文章である。草木の芽生する頃の氣持がよく現はれてゐる。一雨々々暖かになる。……しやうぶが小指程の芽を出して、雨あがりの庭はぼうとけむつて……しやくやくが赤い芽を出して……など何れも陽春三月の氣持である。此の文章の指導には是非かうした氣分の味はれる所に引卒して行くのに越したことはない。文章としての鑑賞は先づ文中の主人公である作者の行動に注意せしめ自然に對してどんな注意と觀察を拂つてゐるかを考へさせなければならない。大體此の頃の兒童は單に人事的な自分等の行動については割合によく想像しうるけれども、自然觀察に對してはかくまで精密な落着いた態度になり得ないものである。作者はその點大いに範とするに足りる。

**三、教材研究**

(1)「語句」

あんばい。　具合。樣子。都合の意味。
ぼうつと。　ぼんやりと。朦朧と。
お節供。　こゝでは五月の端午の節供。
よもぎ。　病魔除けとして端午の節供に軒端に挿す。
しやうぶ。　菖蒲も同樣の意味にて軒に挿す。菖蒲湯は實際に藥湯となる。
かしは餅。　柏の葉で包んだ餅のこと。
しやくやく。　牡丹に似た花。根は藥劑となる。

(2)「事實內容」

菖蒲。　菖蒲草の一名。鳶尾科に屬する多年生草本。葉は細長く、花蓋の內層の片は花柱の花瓣樣の部分より長く廣い。花蓋の外層の片には下部の內面に網狀の斑紋がある。山野に自生するが、又觀賞用として栽培する。端午の節供に用ひる「シヤウブ」は花はつかず香のよいもので之を軒並に挿し、又風呂に入れなどして邪氣を拂ふ。端午の節供を菖蒲の節供ともいふ。
節供。「セツク」節日佳節などの意。人日（ナヽクサ）上巳（ヒナノセック）端午、七夕（タナバタ）重陽の五つを五節供といふ。
鯉のぼり。端午の起りは楚の忠臣で詩人である屈原が泊羅の淵に投じて死んだ時、人々之を憐み其





の日を記念する爲めに年々紙の鯉を作つて水邊に立てゝ屈原の靈を弔つたことにある。
よもぎ。菊科に屬する草で山野に自生する。葉は菊に似て秋の頃黃色い小さな花を開く。嫩葉は餅や團子に混ぜるし、成熟した葉は、もぐさに製する。

四、教材取扱及練習

默讀の後、文字語句について吟味する。次に子供等各自の經驗を語らせる。
學校園又は附近の田園にいつて實地に「芽」の觀察をしてみるのもよい。
一通りの取扱がすんだなら練習に入る。
暖い着物。暖い火鉢。芽生。新芽。軒下。軒毎。一雨々々。あんばい。ぼうつと。はた。なるほど。等について各々練習文を作らせる。

## 第二十六、伊勢參宮

一、要　旨

伊勢神宮の尊さを知らせ、神宮に對する敬虔崇拜の念を植ゑ込むといふのが主眼である。
手紙の形式としては、口語書簡體になれしむることは勿論であるが、手紙を出した人、之を受取つた人の心持についてそれ〴〵に味はせることが必要である。

## 二、指導方針

伊勢神宮は實に我國民尊崇の中心、國家觀念の中樞、國民精神の中核と云へる。神苑神殿の御模樣を敎へ、大いに國民的精神の養成に資すべきである。卷五卷頭の大日本の課と呼應させて此の學年の始終としたものであらう。敎授者は宜しく此の旨を忖度して取扱はなければならぬ。

伊勢大廟に關する文章は兎角堅過ぎたものである。然るに此の文章はさうした氣分のない實にすつきりとした、そして親しみのあるものである。此の點手紙といふ形式の成功してゐる點と見ることが出來る。

「入營中の兄へ」は全篇の序說である。次の本文に入る前書として取扱はなければならぬ。

「父から」は本文である。しつかり力を込めて取扱はねばならぬ所である。

一生に一度は屹度伊勢神宮を參拜するといふ我國民の熱烈なる信仰を兒童の頭にしつかりと打込んでいかなくてはならぬと思ふ。

## 三、敎材研究

(1) 「文字」

參宮（サングウ）正午（シヤウゴ）參り（マヰリ）外宮（ゲグウ）老木（ラウボク）棟（ムネ）貝細工（カヒザイク）





(3) 「語句」

外宮。　山田にあつて豐受大神を奉祀する。

內宮。　宇治にあつて天照皇大神を奉祀する。

神苑。　神宮の境內。

白木造。　シラキヅクリと讀む。

千木。　チギと讀む。棟の兩端にあつて突出したもの。

かつを木。棟木の上に橫に並べたるもので、正面から見て太鼓形に見えるもの（挿繪參照）

## 四、敎材取扱

取扱の順序としてはまづ第一時「入營中の兄へ」第二時「父から」第三時「同所」第四時「總括」一通り讀ませてから文字語句の吟味をする。挿繪と對照しつゝ內容について問答し、研究補說する總括の所では手紙の形式としての、差出人、受取人の關係、文の書出し、文章の書きぶり、文の結尾等についての注意を纏めさせ、神宮に對する感想を各自に發表させてみるやうにする。

漢字の練習としては、

參宮線。參宮みやげ。村社參拜、參拜人。午前。午後。午砲。外道。外科醫。寺參り。百度參り。老人。老體。棟上げ。棟木。貝拾。ほ立貝。細工人。竹細工。

語句の練習として次のものを使用してみること。

おさはり。分家の。すましてから。もたつたかと思ふ。何となく。うやうやしく。何のかざりもない。等。



# 國語級方

# 兒童の文章觀の發達と指導法概說

## 文章觀

何ういふ文がよいものかといふこと、換言せば文に關する理想を文章觀といふ。

### 理想的文章の二要素

理想の文 ｛ 達意的……正しい文……消極的規定
　　美文的……美しく、味あるもの……積極的規定

### 文章觀と兒童の發達段階

尋常小學兒童の發達段階を三つに大別す。

一・二年生　三・四年生　五・六年生

### 一・二年生の文章觀

文の理想は、他律的に、他から規定される。この時代は、父母・教師から譽められる文、よいお點をつけられる文をよいものと心得る時代である。そしてどんな文が譽められるかといふ問に對し、一・二年生の答ふる所は大要次の通り。

經驗したり考へたりしたことを、(1)こまかく、(2)長く書いたもの。

### 三・四年生の文章觀

「文は如何なるものか」といふ問に對する、中級兒の答は大要次の通り。

(1)こまかく書いたもの、(2)長くて面白いもの、(3)骨と肉との交つたもの、(4)對話を挿入せるもの目に見えるやうに書いたもの、(5)爲にたるもの、(6)適當に滑稽の入つたもの、(7)正直に、間違なく眞面目に書いたもの、(8)個性の現はれたもの——書いた人が、男か、女か、大人か、子供かが、はつきり分るもの。

### 五・六年生の文章觀

(1)景色などが目に見えるやうなもの、(2)意味深きもの、(3)感想の入つたもの、(4)作者の心持が現はれたもの、(5)作者の目的がはつきりせるもの、(6)奇拔斬新なもの、(7)眞劍味があふれ、且最後迄





根氣よく書いたもの、(8)變化の中に統一あるもの、(9)材料を精選せるもの、(10)背景のよく書けてゐるもの。

### 各學年指導のモット！

一・二學年 {經驗せることを / 正直に順序よく書く。}

三・四學年 {見聞し、反省せることを、 / 分り易く、面白く書く。}

五・六年生 {見聞し、反省し、內面的に熟慮せる所を、 / 眞劍味と、新しみと深みとを以て、表現す。}

### 指導要項

**取材** 兒童は經驗せる事柄を綴るものであるが、文材は、遊戯・學習・家庭・社會に於ける見聞は勿論、動植物、天文・地象・人事界一般の經驗對象に關して多方面的に觀察し、上級に至りては、科學藝術、道德、宗教的方面に迄手を伸ばさしむ。のみならず、中上級に於ては、是等の題材を單に外面的皮相的に觀察するのみならず、內面的に反省し考慮し、徹底的に理解し、味到し、所謂爛熟せる文材

として、魂を込め、眞劍な態度で表現せしむべきである。

單に文材を多方面的に蒐集するのみならず、中上級に至るに從ひ、漸次精選を加へ、面白味を發見し、之に對する感想や意見をも構成し表現せしむ可きである。

**記述**　低學年に在りては、經驗の想起を刺衝し、時間的・空間的に順序正しく記述し、漸次選擇取捨する工夫を養ふべきである。そして特殊事情の外は、自作・自由發表を原則とする。(此の原則は各學年共通)

中級に於ては、豫め目次を定めて順序を正しくし、輕重・主客に從て取捨伸縮せしめる。又其の文題に含まれる內容の全體、部分何れを主とするかを分別して(全體法・部分法)記述せしめる。そして冒頭、結果から文段の整理等の形式方面を漸次考慮せしめる。

**批正と鑑賞**　批正は惡しき點を指摘訂正すること、鑑賞は專ら美點を玩味し、享樂することである。低學年では誤字・脫字・句讀點・發音表記の自己訂正を指導し、二年生に對しては意味不明の自訂に留意せしめる。鑑賞に關しては、時々參考文を與へて美點を指摘し、又適當なる讀物の選擇を指導する。

中學年に在りては、誤字・脫字・句讀點・發音表記の外、意味不明、重複、引用符の誤りを補正せしむ。又參考文、課外讀物に對し、自力的鑑賞力の增進を圖るべきである。





高學年に於ては、以上の外、用語の適否、心持、まとまり等をも補正せしめる。參考文に關しては表現の巧拙、正否、修飾の適否、內容の深み、新しみに至る迄味到せしめることに努める。

**文話**　既述、文章觀の發達及綴方のモットーの條下を參考として隨時講話することにしたいと思ふ。

**童謠**　兒童も作り、又大人が童心に立歸りて作る。後の場合には、理想の子供として、現實實際の子供よりは、僅かに高き程度に迄大人自身を引下げて作詩し、之に依りて範を示しつゝ導いて行くべきである。

# 第一學期

## 綴方學習の準備

尋常三學年以上になると、教室に入つてから、何をどう書かうなど〻考へるやうでは駄目だ。豫め兒童自身に準備しておかしめねばならぬ。是が爲には『綴方學習帳』を利用せしむべきである。其の樣式は次の如くせしめる。

| 月日 | 文題 | 書くことがら | お點 |
|---|---|---|---|
| 四月三日 | 私の好きな草花 | 1、フリジア、スミレ、アヂサヰ<br>2、花トハノコト(好キナワケ)<br>3、蜂ヤテフノ來ルコト | |
| …… | …… | …… | |
| …… | …… | …… | |
| 四月十五日 | 初夏 | 1、風リン、金魚、苗賣<br>2、着物のかはること<br>3、雨と青葉のいろ | |





月日欄には文題を捕捉した月日を記入し、文題欄には題目を、書くことがらの欄には、其の題目に就て綴るべき内容を摘記せしめる。お點の欄には、其の準備した所を綴りて提出し、其の際教師によりて下された評語を記入せしめるのである。斯くの如くせば「題がない」とか、「文が書けない」などの弱音を吐く必要は更にないであらう。

此の帳面は遊戯の間にも、自習の間にも、食事・散歩の際にも、言はゞ四六時中絶えず携帯せしめて思ひ付いた毎に記入せしめる。此の帳簿は紛失し易き傾向あるを以て、十二分に注意せしむべきものとする。確か、故徳富蘆花氏であつたと記憶してゐるが、氏は入浴中でも創作の題材とか、佳句麗語等を思ひ浮べると、直にあがつて書きつけたといふ話である。文壇の巨頭と仰がれたのも誠に其の故なきに非ずだと思はれる。

### 三年生の文章

#### 一　私の好きな草花

私の好きな草花は、フリジアと、あぢさゐと、すみれです。フリジアは小さな花ですが、大へんかほりがようございます。色は白いのもありますが、うすむらさきもあります。いつも青々として細い葉の中に目をパッチリとあけて咲いてゐます。あぢさゐは花びらが四つで、白やむ

らさきや又水色のもあります。雨にたゝかれたりして、むらさきの色がおちると（褪色すると）今度はもゝ色になつて大へんきれいです。あぢさゐは一とゝころにかたまつて咲きます。葉は大きくて、花は葉の中につゝまれて、ちやうど人がふとんをきてねてゐるやうです。又すみれはいつもやさしく咲いてゐます。春になると大よろこびで、たんぽぽや、てふてふなどがしつて來るところで、やさしく咲きます。そして小鳥も喜んでぴいぴいとさへづります。

私は色々の花の咲く春が何よりも樂しみです。

起首、中要、結末とよく纏り、記述も詳細で根氣よく書いてある。菫の條下に、「たんぽぽや」とあるのは誤りであらう。「みつ蜂や……」などとせばよからう。

**二　おにはの櫻**

おにはの櫻きれいなさくら、
えだからかはいいお顏をだして、
かぜ吹く度ににこにこわらふ、
おにはにおちた、かはいい花を、
みんな一しよに樂しくひろひ、
いとでつないで、首わにかけよ。





此の童謡は、前半は花盛をよみ、後半は散りかけた所をよんだものゝやうに思はれる。從つて此の歌はかなり長時日に亘れる間のことをよんだものと考へられる。

今少しく工夫して、「おにはにおちた」のた字の下に『ら』字を補ふと之れ以後（歌の後半）は期待若くは想像になる。換言せば、今は滿開でゐるが、散りかけたら、斯く々々しようといふ希望を表現したものとして、纏りのよいものとなるであらう。

或は又、此の歌を(一)・(二)の二つに分け、最初から「ににこわらふ」迄を(一)とし、それ以下を(二)とする。斯くする時は、内容が數月に亘らうが乃至一年に渡つても何等差支はないのである。

**顏　題**

(1) 春の野、(2) わらび摘、(3) つくし(土筆)、(4) たんぽぽ、(5) めだか、

**三　遠　足**

昨日はたのしみに待つて居た遠足でございました。朝早く目がさめた時、まどガラスに朝日がキラ〳〵とかゞやいて居ましたので、とびおき、したくをして、いそいで學校へ行きました。

高田の馬場まであるいて、電車で東村山まで行きました。きれいなこう外の、靜かな道をあるきつゞけ、ちよ(貯)水池に着いた時は、もうお晝近くでありました。間もなく、小高い山の林の

中でおべんたうをいたゞきました。

大きなちよ水池のすき通るやうなお水、長い橋、はるか向ふに見えるふん(噴)水、(一)森、繪のやうな景色でした。向ふの山には山つゝじがたく山さいて居ました。

一時半ごろ、おあつまりをしてから、又(二)靜かな道をあるいて、かへり道に(三)着きました。途中、竹やぶの中に大きな竹の子が生えて居ました。空高く、四五だいのひこうきもとんでゐました。そのうち村山のえきに着き、それから又電車で高田の馬場まで來て、(四)くたびれた足をひきづりながら、やうやくおうちへ着きました。

目的地から、途中(殊に歸途)の敍景も、三年生としては、精しく又雄大に描寫してある。そして殆閑文字がない。

一・二年生は、遊んだこと(鬼ごつこをした、縄とびをしたなどと)食べたことを澤山記述するが此の文には、それがなくて、敍景に全力を盡したと言つてもよい。之は大に注意すべき點であらう。

(一)森の下に「など」を補ふか、さなくば「シロマル」(「。」)即ち句點にて切る。

(二)靜かな道をあるいて歸途につく……は道理に合はぬ。歸途に就いて靜かな道をあるくとすべきもの。

(三)「着く」は漢字を用ふるならば、「就く」に改む。





(四)くたびれた足……大人から見ば、紋切形な表現であるが、三年生としては別に咎めない方がよい。其の内自然と止めるやうになるであらう。

## 四　初夏

一雨ごとに、だん〳〵青葉の色がこくなりました。(一)見わたすかぎり一めん青々としてゐます。風がふくと、ちやうど海のなみのやうですが、風がやむと、青びろうどのやうです。見てゐますと、きれいで、氣がせい〳〵いたします。(二)私は初夏が大すきです。

(一)「……まして」と續ける方がよい。

(二)平凡な結びであるが、是亦前例「くたびれた足……」同樣である。

別に取出でゝ言ふ程な成績ではないが、波のやうだ、天鵝戎のやうだと言つた所が警句だ。

## 五　初夏

あをいわかばに　さら〳〵と、
　風がふくたび　葉がゆれる、
(一)そのきれいさが　あんまりで、
　みとれてゐるとまたふくよ、
あちらこちらで　ゆら〳〵と

大なみ小なみが　ゆれてゐる。

（一）「そのきれいさが……またふくよ」迄全部省くのがよい。

**六　兄さんにあげる手紙**

兄んん、御丈夫ですか。うちではみな丈夫ですから御安心下さい。お母さんがちよつと目をわるくしましたが、あと一週間ぐらゐでなほるさうです。

僕は此の間のぎせん（擬戰）に、赤が大勝になつたことを、綴り方にかきました。すると今日、美上になつてかへつて來ました。兄さんがかへつていらつしやつたら、僕の綴り方の美上になつたのを皆見せて上げます。兄さんの方もしけんがはじまりましたか。姉さんは毎日しけんだといつてさわいでゐます。

おぢいさんもお父さんも、昨日から旅行にお出かけになつたので、うちでは男は僕一人なので、さびしくてたまりません。この間父兄會があつた時、お母さんがいらつしやいました。そして先生から、少し氣がよわいといはれました。けれども、算術も讀方もよく出來てゐたので、お母さんにほめられました。それではおからだをお大切に、さやうなら。（飯田恒作氏「綴方の本質と指導の實際」二一三頁より）

飯田氏が、同著の二〇〇頁以後に述べる所によると、





第一、書簡文は對者に話しかける心持が基調になつてゐる……

小川さん

小川さん、小川さんは學校へきたいでせう。

**お祖母様に上げる手紙**

お祖母さま、お祖母様はなくなられてさびしいでせう。お祖母様はきつと天國にいらつしやるのでせう。きれいな天使が空一ぱいとんでゐるでせう。お祖母様はさういふたのしい所にをられてうれしいでせう……

第二、書簡文は又、離れる心持（遠く離れてゐる人にやるやうな心持での意）でかくのがよい。

お兄様

私は小さい時は、ずゐぶんお兄様とけんくわをした。私はお兄様のいふことを聞かないで、よく泣かされたのを覺えてゐる。それでお兄様が家にゐなくなつたらどんなに私はいゝだらうと思つたことがあつた。

けれども此の頃では、お兄様が水戸の高等學校へ入つていらつしやるので、何となくお兄様がなつかしくなつた……

此の作者に、兄に送る手紙を喜んで綴るかどうかを問ふ必要はない。と同様に、この作者が本質的な

書簡文を綴るかどうかを問ふ必要もない。指導者は……離れてゐる生活に意味を見出し、其處に醸された心境を實際的に活かして行けばよいのである。（以上飯田氏の說）

題　題

(1) 小川君へ、芳子さんへ。(2) をばさまへ、お姉さまへ。(3) おわかれした先生へ。(4) 東京のおねえさまへ。(5) 北海道のをばさまへ。

七　さくらんぼ

あかいおかほの　さくらんぼ、
　ちいさいおかほの　さくらんぼ、
えだからおちた　さくらんぼ、
　おべゞをきせてあそびませう。
おにんぎよごつこで　あそびませう。
　やほやのみせでもにこ〳〵と
あかいおかほの　さくらんぼ

（一）やほやのみせでも以下は店頭の櫻ン坊で、それより前のは、家庭の庭園に於けるものであらう。





詰り場所の相違があつて、作者が分裂することになる。故に、やほや以下を削除するか、若くは又、それ以下を（二）の歌として（前者を（一）とし）前者と同形になる迄作り足すかの何れかにせねばなるまい。

八　さくらんぼ

まつかなおかほの　さくらんぼ、
　なぜにおかほが　まつかなの、
ほほべにつけて　まつかなの、
　それともだれかに　しかられた？
あたまをふるから　わかつたわ、
　あたしのおくちへ　はいるのが、
つらくてくびを　ふるんでせう、
　それならあたし　たべないわ、
だからしんぱい　しなさんな。

題　題

(1)さみだれ　(2)でんでんむし　(3)夏の夜

## 九　學校のお庭

此の頃は學校のお庭がかはりました。今まで石や木の葉できたなくなつてゐたお池はぬりかへられて、水もはいつてきれいになりました。りく(陸)には、室の前には花畠が出來ました（教室の窓際に、新に花壇がつくられたことをいふ。）其所にお花がうわつてゐます。赤い花黄色い花、きれいです。お池には木からおちたさくらんぼが、金魚のやうにおよいでゐます。池のまはりにはしやぶがうゑてあります。きねんびにうゑた木のまはりの白い花は、雪をちらしたやうにさいてゐます。白蝶花にはてふ〳〵がまつてきます。

(一)陸には……之は池に對して、陸と言つたのであらうが、餘りに業々しい言ひ方だ。

(二)陸のことを言つた後、再び池水へ逆戻りしたのは順序がよくない。(三)櫻ン坊が金魚のやうに浮ぶであらうか。恐らく沈むであらう。目のあたり見たことを如實に書いたのではなく、單なる机上の想像に過ぎないのであらう。

(四)四月二十日の開校記念日にコブシを植ゑ、其の周圍に白蝶花が植わつてゐるのであるから、記念日以下を次の如く訂正すべきである。

記念日にうゑた木の、まわりの白蝶花には、てふ〳〵が舞つてゐる





此の文は要するに、想餘りありて、筆之に伴はないものと言はざるを得ない。

## 一〇　學校のお庭

學校のお庭は、いつも日がよくあたつてゐます。さくらは青葉とかはり、ふぢだなも一日一日としけつてきます。櫻の葉が風のまに〳〵そよ〳〵と、すゞしい風を私たちにおくつてくれます。此の頃はさくらんぼうが、まつかなお顔をしてゐます。時々ぽたり〳〵とおつこちてまゐります。お池はこんどぬりかへられましたので、お水もはいつて、すゞしい氣持がします。

みなさんのおやうふくもかるくなつて、この頃のお庭は元氣にみちてゐます。

(一)以下數行が、甚だよくない。次のやうに訂正しては何うであらうか。

さくらの葉はそよ〳〵とゆすぶられて、涼しい風を私達に送つてくれます。櫻ン坊は眞つ赤なお顔をしてゐて、時々ぽたりぽたりとおちてまゐります。お池は今度ぬりかへられて……以下本文通り。

兒童は得て、「學校のお庭」といふ如き題にて綴る時、一向季節を現はさないで、言はゞ春夏秋冬の何れにも當嵌まるやうな書振をする。俳句の方では季の入らないのを忌むやうであるが、文章でも同樣だと思ふ。「朝」とか「夕方」などいふ題で書くと、同じく季のはいらないのを寧ろ常とするが、私は「時」の極らない敍景文に對しては何となく不愉快を感ずる。

本文は、季がたつぷり入つてゐる。「初夏の校庭」など題する方が適當であるのかも知れない。

## 一一 すべりだい

つるり〳〵と すべりだい、
おすべりだいの おもしろさ、
いつまでたつても あきません、
すべつて上つて またすべる。

凡なれども自然、些のいやみがない。

## 一二 夏休の日記

八月一日 日曜 晴

今日からお休みなので、日記をつけることにしました。

朝、毎日の時間割を、お母様に教へてもらつてきめました。

五時半……おきる。六時半……朝飯。七時半から八時まで……勉強。十二時……お晝。三時……おやつ。夕方……お手傳やお風呂。六時……夕飯。七時半……日記をつけてねる。

今日は時間割の通りにしました。

ほんとうは、お休みになるとすぐ房州の海岸へ行くことになつてゐたのですが、昨日からお母様





が、かげんがわるいので、いかれないでつまりません。

八月二日 月曜 曇

朝勉強してから、吉澤君をさそつて、せみとりにいきました。八まん様の森です。たつた一ぴきづゝしかとれませんでした。おやつをいたゞいてから、君子と二人で水まきをしました。お庭からはじめて、おげんくわん、表通にまでまきました。お母様にほめられました。

マル（犬）があつぐるしがつてゐますから、からだを水であらつてやりました。

八月三日 火曜 晴

房州へいかれなくなつて氣のどくだといつて、今日はお母さんが稻毛へつれていつて下さいました。君子もいつしよです。

稻毛の海はあまりきれいではありませんでしたが、おもしろうございました。あさりを取つたり、かにを取つたりしました。かには走るので、なか〳〵つかまへられません。それでも五ひきとりました。君子はたつた一ぴきです。

それからおよいだり、舟にのつて沖の方へいつたりして、三時になつたのでかへりました。うちへついたら五時半ごろでした。

かへつて見ると、マルが、はながかわいて、くるしさうにしてゐたので、おくすりをのませて

やりました。

八月四日　水曜　晴

朝起きて見ると、やつぱりマルが苦しがつてゐるので、おいしや様にきて見ていたゞきました。牛乳をやつてものみません。おくすりをのませたら、はいてしまひました。時々頭がいたむと見えて、ひん〳〵なくので、かはいさうです。

おやつに西瓜をいたゞいたら、大そうおいしうございました。

ゆふ方、どこかで花火の音がするので、見にでたが見えません。その内に君ちやんがころんで泣いたのでかへりました。

マルが大きな聲でなきます。

八月五日　木曜　晴

今日はマルはさうなきません。よほどよくなつて、牛乳もおくすりものみました。

お母様もよいので、一日中おきていらつしやいました。「もうこのぶんなら二三日中に出かけませうとおつしやつたから、ぼくはうれしくなりました。

おひるから圖畫を二枚かきました。一まいは房州の海一まいはダリアのしやせいです。二枚ともよく出來たとお父様にほめられました。あまりあついので、ゆふはんがすんでから、おにはに





いすを出して、みんなですゞみました。

八月六日　金曜　晴後雨

おひるすぎに急に夕立がふつてきました。大さわぎでした。それでもすぐはれて、すゞしくなつたのでみんな大よろこびです。マルも元氣をだして、雨にぬれたお庭を走りまはつてゐました。

夜神田のおば様がいらつしやいました。

八月七日　土曜　晴

ゆふべおそくねたので、けさおきたのは六時半でした。お母様に、「時間割はどうしたの」と笑はれました。

勉強をすましてから、お母様と二人で、三越へ買物にいつてきました。いよ〳〵あす、房州へいくからです。僕は水泳着と魚をすくふ小さいあみを買つてもらひました。君子には水泳帽子です。

夜はしたくでいそがしうございました。ぼくもう、うれしくてたまりません。君子もよろこんで、とびまはつてゐます。

丸山・千葉・宮川氏著『小學綴方教科書尋三』（一二より）

# 第二學期

## 綴方の具體と抽象

綴方は具體的でなくてはならない。犬を書くにしても、先づ靜的に、犬の毛色恰好をくはしく、又動的に其の活動振を具さに綴らしめねばならぬ。畢竟、動物を題材とする時は、此の動靜を具備すべく、特に其の動的方面を高調せねばならぬ。兒童と共に批評鑑賞する時、文題が動物である時には『よく動いてゐるかゐないかに、氣をつけなさい』とは、私の常套語になつてゐる。兒童は得て『かはいらしい犬です』『いたづらをします』など、抽象的に現はしたがるものであるが、それでは誠に味がない「こんないたづらもする」「こんなこともあつた」と具體的に述べしむるを要する。具體的に綴らんとせば、よく見ねばならぬ。見るとは單り肉眼を用ひるのみならず、心眼を以て其の物に透徹せねばならない。心眼で見るとは、よく事物を思考し內省すること、詰りよく見よく考へて書かしめる。三年生に在りては、一・二年兒が、外面的に見たまゝを記述するとは、自ら其の選を異にする所あらしめねばならないのである。

### 一　いやしんぼう





僕が今朝學校に來る時、どこの生徒か、汽車の中でニツケイを食べてゐたので、「いやしんぼうだ」といつたら、其の生徒は僕をねらめつけた。僕はしらぬ顏して汽車の窓からそとを見てゐた。まもなく汽車が停車場に着いたのでいそいで、おりた。

驛夫さんに切符をわたして、急ぎ足であるいてゐたら、不意に僕のせなかをつかんだものがあるので、びつくりしてふりむくと、さつきのいやしんぼう(一)(してゐた生徒)であつた。僕に、

『よくもいやしんぼうといつたね』

といつて、かたくにぎりしめてゐる。僕は怖くなつて。

『ごめんね』

といつたら、はなしてくれた。

別れたあとで僕はいろ〳〵と考へた。いやしんぼうしたのだから「いやしんぼう」といつたのは、わるいことでない筈だと思つた。しかしそんなことをいふのは、人の前ではぢかゝしたのだから、やつぱり僕がわるいのだと思つた。

作者の體驗を有の儘に綴つただけに、文章が生きてゐる。結末の反省は殊によく出來た。學生としての醜態を憤慨してゞはあるが、輕率に口を利かないものといふことを體驗せしめられたのであらう。相手の年齡は書いてないが、確に年長者で然かも幾分不良性をおびてゐるやうに思はれる。それで、

「ごめんね」と言はざるを得なかつたのであらう。對手の人相・骨格等をくはしく書いたら、更に活躍するであらう。兎に角作者の心持が可なりよく現はれてゐる。

（一）括弧内の文字は取つた方がよい。

## 題　目

(1) くやしかつたこと、(2) 怖しかつたこと、(3) 夏休日記の一節

## 二　お見舞

昨日の朝學校へ行く時、持木君をさそひによつた。長いこと待つてゐたが、あまりおそいので、追田のおばさんが、病氣でねてゐるといふことを聞いたので、ちよつとお見舞しようと思つて走つていつた。（追田の）おばさんがゐたので、

「おばさんの病氣はどうですか」

といつたら、

『大分よくなつたので、今日はおきてゐます』

といはれたので、僕は安心してすぐ持木君の所へ引きかへした。

僕が學校から歸つてくると。お母さんが、





『今日追田のおばさんが來て、泣いて喜んで、うちにこられた。そしておばさんが、

「今朝程はどうもありがたうございました。穣さんが見舞に來てくれました。あなたが(見舞に)いけとおつしやつたのでせう」といはれたので、お母さんは、「いゝえ、一人でいつたのでせう」

といつたら、おばさんは大へん喜ばれた』

と言はれた。そしてお母さんがほめてくれた。

晩にお母さんが、お隣のおばさんに其のことを話したら、お隣のおぢさんもおばさんも、僕をほめて下さつた。

可なり複雜な表現を、何等の錯誤なしに敍述したのは、三年生としては上出來である。是れ偏に「　」「　」が適當に施されたのによると信ぜられる。是等引用符の苟もすべからざることを、十分注意せしむべきであらう。

叔母の心持は固より、母親の心持迄をよく現はしてゐる。

## 三　遠　足

十月二日、お天氣もよくて、遠足にはおあつらへむきの日でした。

（一）朝はやはり私もおきるのがいやでしたが、時間がおそいと聞いて、びつくりして、いそいできものを

きて、おべんとうをつくつていたゞいて、學校に行きました。學校の門を出て池袋にゆきました。池袋から省線で少しいつて、それから汽車に乗りました。少したつて、汽車の窓から外を見ると、大きな河にいくさうとなく、小舟がういてゐます。いねはおもさうにほをたれてゐます。ことしは豐年ださうです。空(二)には白雲が海のやうな空にういて、大入道のやうです。つめたい風が明いたまどから、スウ〳〵と吹きこみます。

間もなく、大宮公園につきました。停車場には「大宮こうゑん十一丁」とでてゐましたが、そんなに長いとは思ひませんでした。

大宮こうゑんについて見ると、廣々とした氣持のよい所です。松の小かげでおべんとうをたべようとすると、日がてつてきたので、おひつこし(引越、移轉)をしました。おべんたう箱をあけて見ると、入れてきたつくだにやお玉(三)(子)が、くしや〳〵になつてゐました。おべんたうがすんで、バナナをたべようとすると、半分以上もくさつてゐました。お菓子をたべて草むらの方へいきました。

すゝきは數かぎりもなくはえて、其の中では虫も鳴いてゐます。がけを下りると、向ふの木々の間をぬうやうに歩いて行く人などが見えました。野ぎくやすゝきを取つて、すべりだいにのりましたら、あまり早くて土の所まですべりました。





おあつまりの時には、ランドセルがなくてこまりましたが、四年のかたに見つけていただきました。ほんたうに遠足はおもしろうございます。

良い所もあり、わるい所もある、玉石混淆の文であらう。敢て平凡とは言へまい。良い所は馬鹿によくて、悪い所は又馬鹿に悪い。其の悪い所を取りさへすれば、三年生としての名文になる。決して平凡の作ではなくて、指導榮えのする文章と認める。ネクタイが異常的によいがと思へば、靴足袋に穴があいてるといふやうな文章である。(一)朝おきてから、汽車に乗り込む迄は、誠に味がない。あつたことは、よくもあしくも、悉く書くといふ、一・二年生の考へがまだぬけてゐない。嘗ても言つたやうに、十分考へて、心眼で見て、選擇取捨せしむべきである。

(二)空には白雲が、海のやうな空に……はまづい。「海のやうな空には、大入道のやうな白雲がういてゐる」とでもすべきであらう。

(三)辨當やバナナの損じたり腐敗したことが詳記されてあるが、此の記事は、ぐしや〳〵になつた玉子、半分腐つたバナナ其の物の如く無味乾燥、是亦適宜取捨すべきである。讀者をして不快の念をさへ起さしめる。

然し、汽車中の景色を現在で書いた點もよく、公園の叙景も要を得てゐる。

斯る成績は、共同批正の好材料であらう。批正材料は玉石混淆のものを以て最適とするからである。

## 四　秋

月のいい夜、私とお姉さまと手紙を出しにまゐりました。四辻を曲つたら、私(一)の大すきなさんまのにほひがいたしました。のはらにいくと、もみぢがあかくなつて、ほかの木は大抵かれてゐました。私はお姉さまとのはらにねて、いい月をながめながら、お話をしてゐますと、秋風が吹いてきて、氣持よささうに木をゆらしてきました。（此の邊少し文章が續き過ぎる。）私とお姉さまとは（二人は……とする）、「もう秋がきたのねえ」と話しながら、手紙を出してかへりました。

時は夜であるが、全體が晝間の樣な書方だ。少くとも夜らしい描寫は皆無（月はあるにせよ）と言つてよい。平凡以下の作である。（一）さんまのにほひも省いて貰いたい。題も「秋の夜」として、夜の特徴の表現に全力を注がしむべきである。

## 五　秋の運動會

十月三十日に僕等の學校の運動會があつた。主事先生（高師附小主事）のあいさつがあり、それから全體の體操があつて、いよ〳〵はじまつた。

きようそうや、リレーや、はた送りなどがどん〳〵と進む。赤も白も一生けんめいにおうえんして、こゑがかれるやうだ。





やがて待つてゐた僕等のきようそうになつた。僕の胸はどき〳〵する。（現在でかいたのがよい）女の一組が始まつた。太田さんが一等。僕の思つてゐた通りである。二の組は田井さんが一等。次は三の組、次は男の一の組。さあ、いよ〳〵僕の組だ。

出發點に出てならんだ。僕はもう、とてもメタルはもらはれないやうな氣がする。まもなく、「オン・ザ・マーク」「ゲット、セット」がか〳〵つた。やがて「ドーン」、僕はうんとうなつてスタートをきつた。

スタートが早かつたので、初めは三番であつたが、第一の曲り角で、堀君におひこされた。僕は、なにくそと思つてヘビーを出した。そしたら第二の曲り角で堀君をぬくことができた「よし、うまいぞ」と思つて、すぐ前の吉川君をぬかうとしたが、なかなかぬけない。その内に第三の曲り角でまた堀君にぬかれてしまつた。「ざんねん」とさけんで、ぬきかへさうとしたが、もうへとへとによわつて、足がもう思ふやうに前に出ない。ところへ、すぐ後に走つて來る誰かが、もう追ひつきさうだ。見ると三橋君だ。三橋君の手が僕の肩にふれさうである。決勝線はすぐ目の前である。僕はもう死んでもいいと思つて、（文字通り一生懸命）目をつぶつて走りこんだ。

誰か僕をだきとめて、旗を渡してくれた。見れば四等のはたである。四等でもメタルがもらへる

のである。僕は大喜びでメタルをいたゞいて來た。何だか三橋君が氣の毒になつた。

それから、デツドボールや、輪ぬきや、リレーレースや、選手きようそうなどいろいろあつて、おひるになつた。

ひるからの一番初めは僕等の「わぬけ、こんぼうおきかへ」である。先生につれられて運動場へ出た。

「しつかりしろ」

「赤にまけるな」

などと、外の組のものがおうえんしてくれる。

そのうちに始まつた。

はじめは女の方で、大分勝つてゐたが、男の方にうつつて、高杉君がこんぼうをころがしてから、だん〳〵まけはじめた。僕の時にはもう一人分まけてゐる。それでも一生けんめいにしたので、僕は一メートルは相手をぬいた。しかし、どうしてもかなはない。とう〳〵、ちやうど一人分だけのまけで、きようそうはをはつた。みんなは、「高杉君のせいだよ」などと、わい〳〵いつてゐた。

それからいろ〳〵あつて、最後に騎馬擬戰があつて運動會は終つた。全たいで赤は五百七十四點、白は五百二十一點、とう〳〵僕等はまけてしまつた。それでも僕はメタルをもらつたから、うれし





かつた。（「綴方教科書尋三」六二頁より）

全文殆どダレた所なく出來てゐる。（欲をいへば、晝食前後の二三行が、一寸ダレてゐるやうだ。）

## 六　夕　方

私がふと西の空を見上げますと、どうでせう、日はもう半分ほどしづみかけてゐます。銀色にふちを取つた雲は、日の前に立ちふさがつてきました。

向ふのろぢの方では子供達が、「夕やけこやけ、あした天氣になれ」と歌つてゐます。おふろのけむりはむく〳〵と、おとなりの方へ行きます。お勝手の方ではお米をとぐ音が聞えて來ます。豆腐賣のこゑもだん〳〵近くなつて來ました。

此の文の構造は遠景から近景に說き及んでゐる、それは別に差支ないとしても、美景の叙述に始つて、比較的美しくない叙述に終つてゐるが、

今、順序を逆にして、「おふろの烟はむくむくと……お勝手の方では……」と、終迄つゞける。之を第一段とし、次には、「ふと西の空を見上げますと……」と第二段、遠景を描寫して文を結ぶことにせば、よくなりはしないかと思ふ。其の間に、中景として近くの森でも配するならば、更に一段の光を添ふるであらうと思はれる。

## 七　雨

又しよぼ〳〵と降り出した雨はやみさうもない。からぼうずのさくらの枝にはつゆがじゆんよくならんでゐて、時々ポツリとおちるのが見える。かば色にかうやうしたもみぢの葉はキラキラと光つてゐる。

時々かさをさした女の方がえうちゑんへはいつていらつしやる。お迎へにいらつしやつたのであらう。しづかに降る時雨の中でお勉強をするのは氣持ちがよい。

之は可もなく、不可もない作品であるが、季節のよく現はれてゐるのが痛快な點であらう。「雨」などいふ題で書くと、四季の何れにも當嵌まる、それだけ又其の何れでもないやうなのを子供は綴りたがるが之は的確に秋の雨を現はしてゐるのである。

## 八　お祭に招く手紙

芳夫君、こんどの土曜日は僕の村の八幡様のお祭だから、よばれてきて下さい。お母様も、叔母様にお手紙をあげたとおつしやつたから、叔母様と一しよにきたまへ。千枝ちやんもつれてね。

おかぐらもあるし、おすまふもあるし、夜は花火もあがるといふことだから、いつしよに見にいきませう。

土曜の日は、學校からかへるとすぐ、村の入口のあの一本杉のとこまでむかへにいつてゐるから、きつときたまへね。

十月十三日

佐藤芳夫様

高村一郎

（「綴方教科書尋三」五七—八頁より）





## 題

(1)お誕日にまねく手紙　(2)取入のお祝にまねく手紙　(3)病氣のよくなつた手紙

## 九　木の葉

一、ちらちらちらと　木の葉がちるよ、
　　風もないのに　木の葉がちるよ、
　　ちらちらちらと　しづかにちるよ。

二、ちるよちるよ　木の葉がちるよ、

風にふかれて　　木の葉がとぶよ、
くるくるくると　　をどつてとぶよ。

二の歌の最初の一節を

とぶよとぶよ　木の葉がとぶよ

と改め、二・三節は原文の儘にせば、一の歌との變化もついて、大に妙なるべしと思ふ。

## 一〇　ラヂオのまね

弟はラヂオが出來てからラヂオのまねをする。

「ＪＯＡＫ、こちらは東京中央放送局であります。たゞ今から、ごば(後場)第三回の放送にうつります。あゝ、百二十六圓八十錢」などと、ふしをつけていふ、しばらくすると、

「これでごば第三回の放送を終ります。この次は大阪電話」などといふ。また、

「これで株式を終ります。あとは六時の英語こう座まで休けいをいたします。ＪＯＡＫ、こちらは東京中央放送局であります」

とか、いつたりする。しばらくするとだまつてしまつたので、何をしてゐるのかと思つて見ると、今度は、





「たゞ今、きかいがこしようしましたから三分間休けいいたします」などといふ。

「これで英語こう座第九週の第三回を終ります。只今から引きつゞきお子供様方の時間にうつります。今晩は大原武先生が、赤ちやん羊といふお話をして下さいます」などといふ。武といふのは弟の名である。赤ちやん羊といふのは、弟がえうちゑんで聞いたお話である。それが終ると、

「これで、きゆう、大原武先生の赤ちやん羊といふお話を終ります。ＪＯＡＫ、こちらは東京中央放送局であります」

といふ。きゆうといつたのは何であらう。それは船橋電信局の電信のまねだ。その次がニュース放送。

「ＪＯＡＫ、こちらは東京中央放送局であります。今日のニュースは大原新聞社のニュースであります。」大原新聞社といふのは弟が作つた名前である。そのわけはうちの姓は大原だからである。

その次は皆うちのことである。それは大がい僕の惡口である、僕はそれでしやくにさはつて、弟がニュースを終つて、

「ＪＯＡＫ、こちらは東京中央放送局であります」といはうとしてゐる所をねらつて、

「今のことはうそであります」

といつておいて、弟の惡口をいつてやる。弟はおこつて今度は其の反對、

「今のことはうそで、前のことが本當なのであります。」

僕はそんなことでけんくわしたこともある。

「JOAKこちらは東京中央放送局であります。皆さまお早うございます。只今から今日の天氣よほうをいたします。南の風天氣よし。もう一ぺん申し上げます。えゝと、南の風、天氣よし。これで天氣よほうを終ります。JOAKこちらは東京中央放送局であります。」弟の天氣よほうはめちやくちやだ。また弟はりようりこんだてのまねもなかゝうまい。りようりこんだての時に出るアナウンサーは鼻つまりなので、弟は鼻をつまんでまねをする。鼻をつまむといきが苦しい。鼻をつまんで、JOAKといふが、それは長くつゞかない。だんだんくるしくなると鼻の手をはなしてしまふ。そらへたばつたと思ふと、さうでない。その間に空氣をすつて休んでゐる。これで大丈夫となると、また鼻をつまんではじめる。

「たゞ今、きかいがこしよういたしましたので、三分間休けいいたしました。」

ある時はメガホンをお兄さんに作つてもらつて、やつたこともある。(飯田氏、三五九頁より)

弟の動作から、頭腦のよさ加減迄、よく現はしてある。作者が弟に對する感情＝好き嫌ひ等の＝は、漠然とはあらはれてゐるが十分とは言へない。自分の惡口を放送するので、憎らしいと思ふこともあるが、大體は好感を以てゐるらしい。此の邊を的確に表現するやう、漸次指導すべきであらう。鼻つ





まみの邊は輕妙なものである。

## 第三學期

### 一　年　始　狀

太郎君、新年おめでたう。

僕はこんど十一になつたよ。君はたしか、こんど十になつたのだね。僕はけさおきるとすぐ、初日をおがんで、それからかきぞめをかいた。こんど學校がはじまつたら、もつていつて見せてあげる。それから、おざうにを七つたべてわらはれた。(「綴方教科書尋三」七七頁より)

### 二　お正月の日記

一月一日　土曜　晴　(よく日があたつてあたゝかい)

朝起きると、ゐどばたで顏をあらつて、それからお父さんとお母さんに新年のごあいさつをした。

(以下略)

一月二日　日曜　晴　(日本晴、風お少しあつた)

五井さんから年始狀がきた。

「正子さん、新年おめでたう。

さつき學校であなたのかほを見て、忘れゐたことを思ひ出してかいたのよ。」

とかいてあつた。だから私も、

「靜子さんおめでたう。私も忘れてゐたのよ、ごめんね」と書いて出した。

夜すごろくをした。私が一等、兄さんが二等、お母さんが三等、弟が四等のびりであつた。

一月三日　月曜　晴（風が寒い）（日記文略す）

一月四日　火曜　曇（少し寒い）

おひるからお母さんと松坂屋へ買物にいつた。私はお人形さんのねだい、弟はまりと自動車のおもちやを買つていたゞいた。ふくびきがあつて、しやぼんとえんぴつをあてた。

一月五日　水曜　晴（大へんあたゝかい）（日記文略す）

（「綴方教科書」七八頁より）

## 題

(1)さむい風　(2)學校のゆきかへり　(3)雪あそび、雪合戰　(4)昨日のお當番　(5)僕のかばん

## 三　ふろりびのいくさ





さあ火がもえた、　今いくさがはじまるぞ、

さあはじまつた、　おもしろい、

ぱち〳〵〳〵、　おほきなおとを、

大砲にしませう、　どんとはねた。

活動に富み、想像も豐富で、調も高い。

## 四　季

春になつて、若葉のもえ出る頃は、小鳥は枝にとまつて囀るし、太陽は氣持よくてつて居るのです。

春は私に取つて大變うれしい時なのです。

(一)夏が來ました。すゞしい風がそよ〳〵と木の間を吹いてくるし、お庭のフーリンは、チロ〳〵とすゞしい聲で歌を歌つてゐます。お晝はせみもさそはれて（風鈴の音に？）なくし、夜はすゞ虫・松虫・くつわ虫、その外いろ〳〵の虫が、きれいなこゑで歌を歌ひ出します。夏も私はすきです。

(二)そろ〳〵木の葉もぱらり〳〵と落ちる時になつたのです。「さやうなら〳〵」と。木はからぽつずになつてきます。

も早、木がらしも、しももやつて來ました。朝は早くから霜でどこもかも、銀色になつてゐます。

夜は大風がびゆう〳〵吹いて、どの家も吹きとばされさうになりました。

四季はこれでおしまひ。

大體が説明文になつてゐる。所で、(一)(二)は記事文のやうだ。「夏が來ました」と言つては説明にならない。詰り説明文にしようか、記事文に書かうかといふ態度が明でない。恐く無知に歸するのであらうから、批正の際、記事文説明文の區別を大略説明すべきであらう。

本文の如きは、いふまでもなく、四季の各特徴を捕へねばならぬ。そして大體はさうなつてゐるが、然し最も著しいものを列擧せねばならぬ。春は、櫻、鶯。夏は、青葉、夕立、海、山、螢。秋は、紅葉、虫、月。冬は、雪、お正月等がそれである。本文では夏は風鈴、蟬をあげてゐて、比較的に完備してゐるが、他の三者は甚だまづい。けれども虫を夏の物と見るのは何うであらう。東京などの大都市では夏間虫を賣つてゐるが、そは人爲によるものであるから、相當斷つた上で用ひねばならぬ。

三年生としてこれ丈書ければ先づ中等の成績ではあるが、漸次上述の指導を要するであらう。結末は滑稽である。取らしむべきであらう。文には尾括式といふのもあつて、終りに全體を總括するのもあるが、竝列體に書流す式もなくはない。清小納言の「四季のさだめ」の如きがそれである。

## 題





(1)梅、鶯　(2)秋と冬、春と冬　(3)初春

## 五　進　さ　ん

今年一年になつた弟は、名を進といつて、それは〳〵やさしい子です。兄弟中で一番やさしい弟です。

「お姉さん〳〵」といつて私とよく遊びます。三月のごせつくの時のことであります。進さんは「おひなさま」にといつて、たくさんもないちよきんの中から、私におくわしを買つてくれました。

私は父や母から、度々お金をいただいて、たくさんたまつてゐますが、人にやることは中々できません。それに進さんは、「おひな様に」といつて、お菓子を買つてくれたので、はづかしくなつてしまひました。

その時私は、五月のごせつくの時には、おのぼりを買つてやらうと思ひました。いよ〳〵五月になつた時、おのぼりにしようか、きばの武士にしようかと思つてゐるうちに、みなうりきれになりましたので、私は進さんにほんとうにすまないと思ひました。

それでも進さんは別に氣にもとめないで、「お姉さん〳〵」と、くつついてきます。兄が少し氣がむかないで、ごむりをおつしやることがあつても、けつしてさからうことはありません。ちやんといふことをきいて「はい〳〵」といつてゐます。

進さんの弟の尙さんは、進さんのことをよくいちめますが、進さんはいふ通りになつて、めんだうを見ます。それですから、お母さんは進さんのことを大そうかはいがつて、進さんのいく所へいつもついていらつしやいます。父もかはいがります。

いつも小さいやさしい聲で本をよむので、おとなりのをばさまが、「小さいお嬢さまがよくごべんきようなさいますね」とおつしやいました。

この間、上の前齒をぬかれたので、はつかけ（齒ッ缺）になりました。皆に「おちいさん」といつて笑はれます。すると自分もをかしくなつてわらひます。そして何かいひますがこゑがもれて聞えません。私は進さんを朝、學校へつれて來て、それからにもつをしまはせて、一所にあそびます。それでおかねがなると、すぐ、れつにならばせます。兄がライオンならば、尙さんはとらで、進さんは、かはい〻〳〵しろうさぎです。（飯田氏著『綴方の本質と指導の實際』四三四頁）

性格の描寫がまるで專門創作家のやうだ。進さんを中心に、之に對する作者自らの感情は勿論、父母の心持迄、大要描き出してある。隣のをばさんの口を借りて、優しい言動を證明するが如きは、拔目のない着眼であらう。兄をライオン、弟を虎に比し、主人公の性格をクッキリと描寫せる點も拔目がない、のみならず、結末に千鈞の重さを添へる。大人であつたら、進さんの少し優し適ぎる點を氣にして、氣分を引立てる工夫にまで論入するかも知れない。

# 算

# 術

# 目　次

## 第一學期

前學年復習の指導……1
唱へ方、書き方の指導……4
暗算一の指導……6
加法一の指導……13
暗算教程の指導……15
加法二の指導……17
長さに關する指導……18
暗算教程の指導……20
加法三の指導……21
暗算教程の指導……23
桝目についての指導……23
應用問題一の指導……26
筆算減法の指導……30
減法一の指導……32
暗算教程の指導……33
減法二の指導……38
暗算教程の指導……40
減法三の指導……40

暗算教程の指導……42
減法四の指導……43
暗算教程の指導……44
名數計算の指導……44
應用問題二の指導……45
復習一の指導……50
應用問題三の指導……52

第二學期

暗算二の指導……55
筆算乘法の指導……58
乘法一の指導……61
乘法二の指導……63
乘法三の指導……66
應用問題四の指導……68
乘法四の指導……71
乘法五の指導……75
乘法六の指導……78



乘法七の指導……80
應用問題五の指導……81
復習二の指導……83
應用問題六の指導……84
暗算三の指導……86
除法一の指導……87
除法二の指導……89
除法三の指導……91
應用問題七の指導……93

第三學期

暗算四の指導……94
除法四の指導……96
除法五の指導……99
除法六の指導……101
除法七の指導……103
應用問題八の指導……104
復習三の指導……106
應用問題九の指導……109

# 四月の指導

## 前學年復習の指導

**指導の要旨** 本學年の教程に入るに先つて、前學年の復習を課す所以は

1. 前學年に於ける學習の補充
2. 新教程の學習に對する基礎の確立
3. 今迄でに學習せる主要教材の練習

の三つの目的を果さんが爲めである。從つて指導者は所謂復習であるからと言つて、通り一遍の取扱に甘んずる事なく、巧に上述の目的が達成されるまで之を繼續的に活用して、相當の効果を收める迄では此の教程の取扱を止めない事にしたい。

**指導の要領**

一通り取扱が終へても當分は新教程を學習する前には必ず數分を割いて是が練習にあてる。

教師用書にも注意してある通り、是は凡て暗算で解決させる事になつて居る。

教科書の配列は

1. 加　法
2. 減　法

3. 乘　法
4. 除　法

となつて居るが、一通りの取扱がすんで、第二段の活用期には入つたら兒童の能力に應じて適當に斟酌し、時には混合して課す方がよい。暗算にも視暗算と聽暗算の二種類あるが、どちらにも習熟させなければならない。併し「視暗算より聽暗算へ」、是が指導の順序であらう。

問題の提出法としては板書や刷り物に依る場合と口頭に依る場合があるが、時々應用問題或は名數計算の形で出題する事を忘れてはならない。

此の種の學習は始めは「紙ノ代ガ10錢筆ノ代ガ8錢デス、皆デ幾ラデスカ」と言ふ樣式で提出する方がよいが、究極は器械的、反射的の應答を目的とするのであるから、其の練習法に付いては色々工夫をこらす必要がある。器械的な練習法としては

〔寄セ算〕

〔引キ算〕

上の樣な教便物を大きくボールか何かで作り、中の 10、9



を適當にチョークで書き代へられる樣に切り取つて置き黑板の片すみへでもつるして置くか、或は謄寫刷りにして兒童に渡し、中の數と外の數を寄せさせると、兒童は面白がつてやる。引算の場合にも出來るし、掛け算、割り算も矢張同樣にやれる。

〔掛ケ算〕

〔割リ算〕

**補充問題**

次ノ問題ヲ暗算デ解キナサイ。

1. 蜜柑ガ 490個箱ニハイツテ居タ。ソコヘ又60個ヨソカラモラツタ。皆デ幾ツニナツタカ。
2. 僕等ノ組ニハ生徒ガ86人居ル。其ノ中38人ガ女生デアルト、男生ハ幾人カ。
3. 僕ノ鉛筆ハ長サガ 20cm アル。6本ツナゲルト幾cmニナルカ。
4. 250圓ヲ5等分スルト幾ラニナルカ。
5. 5320人＋800人　　6100枚＋700枚
   4300圓－800圓　　1000本－300本

780＋20　790＋10　998＋2
537—37　670—70　100—36
10×8　300×3　34×7
221×4　302×3　512×3
400÷2　98÷4　369÷3
300人÷□＝60人　480枚÷□＝80枚

唱へ方、書き方の指導

**指導の要旨**　1千以上1萬未滿の數の唱へ方と書き方を指導するのであるが、指導の眼目は言ふ迄でもなく數範圍の擴大にあるのであるから、只徒らに數字の遊戯に墮すこと無きやう十分注意しなければならない。

**指導の要領**

1. 上述の數觀念を與へる爲には先づ

イ、100の何倍と言ふ數

ロ、何千と言ふ數に1000未滿の數を加へたる數

の二方面についての取扱ひが無くてはならない。而して

イ、の方の取扱ひは

10の2倍、3倍は幾つか……20、30……

100の2倍、3倍は幾つか……200、300……

1000の2倍、3倍は幾つか……2000、3000……

と言ふ風に指導し、次に1000＋5、1000＋15、1000＋105……を幾つと言ふかを知らせる。而して數の內容數の大いさに



ついては常に注意して吟味し、學校の生徒數、町村の人口其他實際の數量について兒童の數觀念を深めてやらなければならぬ。

ロ、の方面の取扱ひとしては、

9＋1＝10　90＋10＝100

これの發展として

900＋100＝1000

を理解させ何千と言ふ數の讀方を指導する。

是は或は

1×10＝10　10×10＝100

と同樣に 100×10＝1000 と展開させてもよい。

要するに

1……第四桁（千）
0……第三桁（百）
0……第二桁（十）
0……第一桁（一）

について說明し、年鑑等の統計中から適當な材料を選んで讀み書きの練習をさせるとよい。

何千と言ふ數に1000未滿の數を足す場合は言ふ迄でも無い。

二千に七十足すと幾つになるか……2070
二千に七十九足すと幾つになるか……2079
二千に百七十九足すと幾つになるか…2179

と言つた樣な取扱から、これも矢張實際の數について讀み書きの練習をさせるとよい。

## 暗算1の指導

**指導の要旨** 筆算の基礎としての暗算を指導する。教程の內容を分類すれば大體次の通りである。

1. 何千と何千との加減——但し一萬未滿——
2. 何千何百と何百との加減——但し千の位に影響せず——
3. 何千何百と何百との加減——一般の場合——
4. 何百を基數倍すること。
5. 何千何百を基數にて割ること——割り切れる場合—
6. 三位數を十倍、二位數を百倍すること。
7. 四位數を十又は百で割つて割切れる場合。

**指導の要領** 教科書には暗算は所々に一括して出してあるだけであるが、是は決して一度にまとめて課せばよいと言ふ意味ではない。教科書の所々に出て居る暗算教程は言はゞ暗算問題の標準を示したものであるから教師は是を活用し補充問題を選擇して、繼續的に始終其の練習に努めなければならない。

問題の提出方は板書或は刷物に依つて視暗算をさせるか口頭で提出して答へさせるのであるが、視暗算の方が聽暗算より通常やりよいから「視暗算より聽暗算へ」發展させる



やうな態度で指導したらよいと思ふ。暗算は究極は器械的に出來るやうにならなければならないのであるが、教師用書にも注意してある通り、時々色々な種類の名數の形で提出する方がよい。又無名數で提出するやうになつたら次の「補充問題7」に載せてあるやうな形にして興味ある學習をさせる事も必要である。

**補充問題** 次ノ問題ヲ暗算デ解キナサイ。

1. 兵隊ガ1100人キルトコロヘ又 800人來タ。皆デ幾人ニナツタカ。
2. 私タチノ學校ニハ生徒ガ1300人キマス。ソノ中男生ガ 700人デアルト、女生ハ幾人カ。
3. 1ツノ箱ニ蜜柑ガ 200ハイツテキル。
   コンナ箱ガ7ツアルト。皆デ蜜柑ガ幾ツアルカ。
4. 學校ノ生徒ガ2000人キル。コレガ4列ニナラブト、1列ガ幾人ニナルカ。
5. 

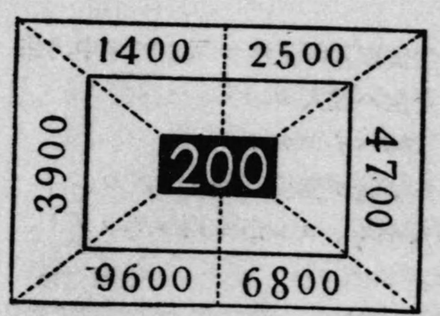
| | |
|---|---|
| 5300＋400 | 4100＋700 |
| 4300＋500 | 4700—400 |
| 7800—400 | 2900—700 |
| 900＋100 | 500＋600 |
| 8200＋800 | 1500＋800 |
| 1000—100 | 5300—600 |
| 7200—800 | 2000—5 |

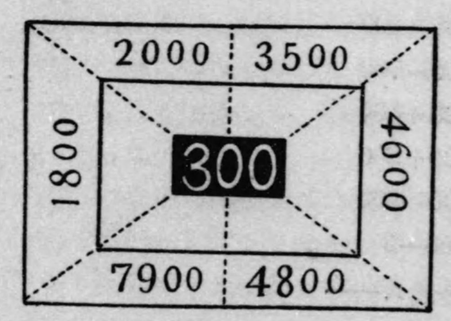
6. ——刷リ物ニシテ渡ス——

5000＝ 700＋□ 500＋□ 300＋□ 200＋□ 1500＋□

7000＝ 400＋□ 600＋□ 900＋□ 700＋□ 3800＋□

7. 外ノ數カラ中ノ數ヲ引イテ答ヲアイタ中ヘ書キ入レナサイ。——刷物トシテ渡ス——




8.

| | |
|---|---|
| 300×6 | 800×8 |
| 400×9 | 500×7 |
| 400×6 | 900×2 |
| 800×9 | 600×5 |
| 1000÷2 | 1400÷2 |
| 1600÷4 | 2400÷8 |
| 2500÷5 | 5400÷9 |
| 2800÷4 | 8100÷9 |



9.

| |
|---|
| 15 |
| 23 |
| 30 |
| 47 |
| 55 |
| 88 |
| 100 |

×10

10.

| |
|---|
| 1500 |
| 2300 |
| 3000 |
| 4700 |
| 5500 |
| 8800 |
| 100 |

÷10

## 筆算加法について

**筆算形式の發達**　元來計算は「數が極めて小さい時」とか、「數の項が少い時には殆んど暗算で用が足りるのであるが數範圍が擴大されるにつれ計算の困難を來し、暗算にては到底解決する事が不可能になるに及んで、遂に形式等の發生を見るに至つたのである。即ち筆算は其の當初に於ては只計算の結果を得る爲に、自由に必要な數だけを控えて、記憶を助けようとしたものに過ぎなかつたのであるが、それが漸次工夫改良され今日の如き形式にまで發達した。

加法形式發達の段階を示せば次の如くである。

1. 必要な數字だけを記錄する程度
2. 上述の數字を位に依つて整理する程度

3. 符號、横線を使つて結果を示す程度

4. 思考過程を工夫する段階

イ、暗算形式で處理する段階

ロ、部分和を上位より求め、其の和を求めて行く段階

ハ、部分和を下位より求め、其の和を求めて行く段階

かうした段階を經て今日の如き算法が出來上つたのであるが、兒童に算法を會得させるに當つてもかゝる過程を一通り念頭に置くことは、指導上何かと便利であらうと思ふ。自分は個體發生は種族發生を繰返すといふ生理學上の原則は、思考發展上に於ても或程度まで適用出來はしないかと思つて居る。

**指導の要領** 筆算加法が果して上述の如き經過を通つて發展したものとすれば、實際指導に當つても或程度迄根底を其の發展の上に置かなければならない。されば自分は次のやうな方法で其れが指導に這入つてはどうかと思ふ。即ち、

1. 卑近な事實問題に依つて加法筆算の地位を提出する。

2. 算式を工夫せしめる。

イ、先づ平易なものについては暗算にて解決させる。

ロ、算式のみにては計算が困難な場合に直面させて筆算法に入る準備とする。

3. 實地指導上の段階

イ、各數の桁を縦に揃へて書く手續。



ロ、和を表はす手續——横線と加號。

ハ、計算過程の吟味。

暗算形式より發展して、各桁別々に部分和を求めて行くやうに仕向ける。

a. 被加數に加數を大きな桁より順次に加へて總和を得てから答を書く。

b. 被加數、加數を大なる桁より1桁づつ順次に加へて行つて總和を得てから答を書く。

c. bの扱に依つて求めた部分和を直ちに書き下して行く。

d. 末位より部分和を求め、總和を求めてから書く。

e. 下の桁より部分和を求め、其の都度書いて行く。

以上は筆算加法への導入方法の概略であるが、必ずしも一一此の經路を辿れと言ふのでは無い。

要は今日の完成した形式に一足飛びに到達せしめるより効果があると言ふまでである。

**指導の準備** 形式の指導に先き立つて先づ第一に爲す可き事は兒童の能力の程度と缺陷の調査である。

自分は次の如き問題で視寫と暗算とを試査して見るとよいと思ふ。——印刷して渡す——

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| I | 2+1= | 9+2= | 8+9= | 9+1= |
| | 6+2= | 1+9= | 1+3= | 3+8= |
| | 7+4= | 5+5= | 2+2= | 5+4= |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 0+2= | 7+8= | 9+3= | 2+4= |
| 7+1= | 6+7= | 4+9= | 7+3= |
| 3+4= | 2+3= | 5+9= | 0+3= |
| 8+5= | 2+5= | 6+9= | 8+2= |
| 8+6= | 9+5= | 1+6= | 3+9= |
| 8+8= | 4+2= | 4+3= | 0+6= |
| 2+9= | 6+5= | 5+3= | 9+8= |
| 6+8= | 6+6= | 1+8= | 7+6= |
| 9+4= | 1+5= | 3+2= | 7+0= |
| 4+8= | 7+5= | 1+7= | 9+4= |
| 3+3= | 7+2= | 8+4= | 8+7= |
| 9+9= | 4+8= | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| II | 1+2+5= | 2+8+7= | 9+8+8= |
| | 2+8+5= | 6+3+4= | 1+2+4= |
| | 4+6+5= | 9+7+1= | 2+7+4= |
| | 5+9+6= | 4+0+8= | 1+4+2= |
| | 3+7+4= | 6+9+2= | 4+8+1= |
| | 5+5+8= | 8+3+6= | 3+9+3= |
| | I+4+3= | 5+6+8= | 3+5+1= |
| | 4+3+5= | 4+5+2= | 8+8+4= |
| | 6+0+5= | 6+7+8= | 5+8+9= |
| | 4+6+9= | 5+7+8= | 6+6+7= |

III 視寫(一分間) ——正シク速ク、



| | | | |
|---|---|---|---|
| 347 | 690 | 869 | 934 |
| 827 | 745 | 691 | 557 |
| 468 | 247 | 493 | 271 |
| 134 | 456 | 450 | 345 |
| 241 | 508 | 681 | 197 |
| 563 | 481 | 624 | 745 |
| 286 | 623 | 712 | 129 |
| 348 | 273 | | |

◇注　意

以上の成績は筆算の其れと必ず一致す可きものであるから指導者は之に依つて兒童の能力を調査し、缺陷を發見したならば、速かに之を救濟す可きこと言ふ迄でも無い。

## 加法1の指導

**指導の要旨** 各桁共繰上らない場合の寄せ算を指導する。此處では前にも述べた通り、先づ加法の形式として完成したものを指導するのであるが、此處では唯、今迄暗算に於て上位から順に足して居たものを、筆算では末位から加へると言ふ點を判然理解させればよいのである。

**例題** 一郎サンハ1圓35錢ノ帽子ト1圓23錢ノ鞄ヲ買ヒマシタ。皆デ幾ラ拂ヘバヨイデセウカ。

A. 導入ノ仕方

イ、一郎サンハ何々ヲ買ツタカ。

ロ、問題ハ何ヲ尋ネテ居ルカ。

ハ、ドウスレバ解ケルカ、暗算デ困難ナ時ハドウスレバ良イカ。

B　解決ノ工夫

イ、1圓35錢ト1圓23錢トヲタス。

ロ、5錢ト3錢デ8錢ニナル。

ハ、30錢ト20錢デ50錢ニナル。

ニ、1圓ト1圓トデ2圓ニナル。

ホ、故ニ皆デ2圓58錢ニナル。

C　計算法ノ指導

| 圓 | 錢 |
|---|---|
| 1 | 3 5 |
| +1 | 2 3 |
| 2 | 5 8 |

1. 位ヲ揃ヘル。
2. 下ノ位カラ部分和ヲ求メテ書ク。
3. 數字ヲ正シク書ク。

答
2圓58錢

D　驗算法ノ指導

| 圓 | 錢 |
|---|---|
| 1 | 2 3 |
| +1 | 3 5 |
| 2 | 5 8 |

加數ト被加數トノ位置ヲ交換シテ加ヘテモ値ニ變リハ無イ。

◇注　意

指導者は問題の提出法として次の諸注意を必要とする。

1. 時に口頭又は漢字を以て問題を提出する事。



2. 成る可く事實問題、應用問題或は名數の形として提出すること——尤も最後は器機的練習に到達す可きものである。

補充問題

1. 次ノ寄セ算ヲシナサイ。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 325 | 234 | 553 | 836 | 641 |
| + 412 | + 432 | + 126 | + 152 | + 347 |
| 人 | 本 | 枚 | 冊 | 軒 |
| 125 | 327 | 536 | 145 | 227 |
| + 223 | + 312 | + 242 | + 324 | + 462 |
| 15 | 134 | 4321 | 1234 | 23 |
| 52 | 212 | 1312 | 2451 | 411 |
| +31 | + 333 | +2345 | +4213 | + 566 |

2. 次ノ數ヲ寄セナサイ。

イ {三百二十五 / 四千百二十二 / 五十二}　　ロ {一千二百五十 / 三百六 / 三十二}

## 暗算教程の指導

**指導要旨** 教科書には此の様な形式で所々に暗算教程を挿入してある。暗算は一時に少し許りをかためて取扱つた所で何にもならない。

始終まんべん無くやらなければ効果は擧がらない。此處に載つて居る六題の問題も、是だけやればそれで足りると言

ふのではない。

斯うした問題は是非とも暗算で解決出來るやうにしなければならぬと言ふ標準を示したと解釋して始終類似の問題を課して錬磨す可きである。提出法は始めは視暗算、十分練習がつんだら聽暗算を課す可きである。

**補充問題**

| 錢 | 本 | 枚 | | |
|---|---|---|---|---|
| 61 | 36 | 44 | 52 | 64 |
| +27 | +53 | +22 | +37 | +32 |
| 77 | 300 | 220 | 706 | 812 |
| +22 | + 600 | + 660 | + 102 | + 107 |

### 1錢＝10厘ノ指導

1錢＝10厘　　1圓＝10錢×10＝100錢

從ツテ　　1錢＝1000厘デアル。

**例題**

| 圓 | 錢 |
|---|---|
| 3 | 8 0 |
| | 1 0 |
| +5 | 0 2 |
| 8 | 9 2 |

圓ノ位ハ圓、十錢ノ位ハ十錢デ並ベル。圓、錢ノ間ニ十錢ノ位ガアルカラ一ツ位ヲ空テカク。

答　8圓92錢

**補充問題**

1. 5錢ハ何厘カ、又7錢ハ何厘カ。
2. 1圓ハ何錢カ、又5圓ハ何錢カ。
3. 太郎サンハ次ノ買物ヲシタ。皆で幾ラカ。



| | 圓 錢 |
|---|---|
| 机…… | 3 7 5 |
| 筆入…… | 2 0 |
| 本箱…… | 4 0 2 |

4. 次ノ計算ヲシナサイ。

| 圓 錢 | 圓 錢 厘 | 錢 | 厘 |
|---|---|---|---|
| 3 4 2 | 4 2 5 0 | 5 0 0 | 1 3 2 5 |
| 2 0 4 | 1 3 0 3 | 1 2 4 | 2 0 3 2 |
| +4 3 0 | 1 2 3 2 | 1 5 0 | 5 0 0 |
| | +2 0 1 0 | + 5 | +1 0 4 0 |

### 加法2の指導

**指導の要旨**　一桁繰上る場合の寄せ算を指導する。是は形式は前例と全然同一であるが、或桁の和が上位に繰上ると言ふ事が兒童には非常に困難なのである。從つて繰上る可き數を次の桁の最上部の數に加へる手續きを兒童に忘れない樣にさせる事が肝腎である。それには1上つてとか、2上つてとか10上り20上りと言ふ樣な事を小聲で唱へさせるのも一法であらう。

**例題**　花子サンノ學校ニハ女生ガ419人、男生ガ543人居マス。皆デ幾人居ルデセウカ。

A　導入ノ仕方

イ、算式ガ立テラレマスカ。

ロ、計算デ前例ト違フ所ハ何處カ。

B　式ト計算

419人＋543人＝962人

$$\begin{array}{r} 4\,1\,\overset{1}{9} \\ +\,5\,4\,3 \\ \hline 9\,6\,2 \end{array}$$

1. 9ト3デ12ニナル。10繰上ツテ、
2. 10ト10デ20、ソレニ40加ハツテ60、
3. 400ト 500テ 900ニナル。
4. 故ニ皆デ 962ニナル。

注　意

1. 此の種の問題中兒童が間違ひ易いのは 436+354 の如く或桁の和が 10 になる時であるから指導者の注意を要する。
2. 問題提出上の注意は前に同じ。

## 長さに關する指導

**指導の要旨**　1m＝100cm　1cm＝10mm の復習とメートル、センチメートル、ミリメートルの略字 m, cm, mm を教へる。

是は只空に數字の遊戯として器械的に取扱ふ事無く、生活的事實と結びつけて長さの觀念を整理しつゝ取扱ふ可き事言ふ迄でもない。

**取扱ひ例**　1. 次ノ長サヲセンチメートル尺デ測リナサイ。



机ノ縱(　　)　机ノ横(　　)　讀本ノ縱(　　)
讀本ノ横(　　)　机ノ高サ、自分ノ身長(　　)

2. 此ノ物差ハ1メートルアル。1メートルハ幾センチメートルカ。
3. 5メートルハ幾センチメートルカ。又 7 メートルハ幾センチメートルカ。
4. 讀本ノ縱ノ長サハ22センチメートルデアル。幾ミリメートルカ。
5. メートル、センチメートル、ミリメートルノ代リニ略字 m, cm, mm ヲ用ヒル。次ノ長サヲ讀ンデゴラン

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1m | 5m | 7m | 10m | 100m |
| 2cm | 8cm | 15cm | 200cm | 2 0cm |
| 3mm | 7mm | 19m | 1(0m | 127mm |

6. 次のりやく字の書き方をおけいこしなさい。

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| m | m | m | m | m | | | | |
| cm | cm | cm | cm | | | | | |
| mm | mm | mm | mm | | | | | |

(上の如き表を質のやゝよい紙に謄寫刷りにして渡し。練習させる。尙算術帳へも何べんも書かせて練習させる)

7. 1番ノ長サヲ略字ヲ用ヒテ書キナサイ。
8. 略字ヲ使ツテ　メートル、センチメートル、ミリメ

ートルノ關係ヲ表ハスト次ノ如クニナル。

1m=100cm　　1cm=10mm

**補充問題**

イ、293m+131m+165m

ロ、4055cm+27cm+505cm

ハ、234cm+502cm+343cm+800cm

ニ、1092mm+270mm+35mm+372mm

### 暗算教程の指導

**指導の要旨** 二つの2位數の和を求める暗算で1の位の數の和が10以上の數になるものについては既に出て居るが10の位が10以上になるのは是が始めてであるから注意して指導しなければならない。

注　意

前にも述べた通り此の標準に從ひ繼續的に指導しなければ効果はあがら無い。

**補充問題**

暗算ニテ次ノ寄セ算ヲナサイ。

| 人 | 冊 | 枚 | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 35 | 53 | 66 | 72 | 35 | 96 |
| +28 | +29 | +73 | +47 | +74 | +13 |

| cm | m | mm |
|---|---|---|
| 290 | 860 | 506 |
| + 330 | + 220 | + 108 |



## 五月の指導

### 加法3の指導

**指導の要旨** 二桁以上繰上る場合の寄せ算を指導する。前の場合は一桁繰上るだけであつたが今度は二桁以上繰上るのであるから相當困難である。

教科書は問題を三種に分類して例示して居るが最初の一題を研究すれば他は推して知る事が出來よう。

**例題1** 一郎ノ家カラ橋ノ所マデハ 513m、橋カラ學校マデハ 748m アル。太郎ノ家カラ學校マデハ幾m アルカ。

A　導入ノ仕方

イ、問題ハ何ヲ尋ネテ居ルカ。

ロ、算式ヲ立テナサイ。

ハ、前ノト違フ所ハドコカ。

B　計算法ノ指導

513m+748m=1261m

| m | |
|---|---|
| 513 | 1. 3ト8デ11. 10上ツテ、 |
| + 748 | 2. 10ト10デ20. 20ト40デ60ニナル、 |
| 1261 | 3. 500 ト 700デ1200 |
| 答1261m | 4. 故ニ答ハ1261ニナル、 |

**例題2** 一郎サンガ四月ニ買ツタ學用品代ハ5圓17錢、五月

ニ買ツタノハ 7 圓98錢デシタ。一郎サンガ三年生ニナッテカラ買ツタ學用品代ハ皆デ幾ラカ。

**指導法** 1. 先ヅ算式ニ導ク——加法

2. 其ノ演算ノ構成

3. 前題トノ比較ヲサセル——三度繰上ル

**補充問題**

1. 次ノ寄セ算ヲシナサイ。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 513 | 7526 | 2483 | 756 | 2702 |
| + 748 | +1538 | +3580 | + 328 | +3848 |
| 720 | 374 | 283 | 768 | 877 |
| + 396 | + 389 | + 967 | + 874 | + 588 |

2. 次ノ寄セ算ヲシナサイ。

872+186　933+580　3752+2681

452[illegible]+3074

3. 次ノ寄セ算ヲシナサイ。

3472+4580+1699

3732+2657+2839

564+205+131

1484+4232+1526

3537+2534+3349

255+164+829

891+234+567

3572+1353+3183



4. 次ノ寄セ算ヲシナサイ。

2413m+4756m+3752m

1326m+2248m+1289m

85mm+78mm+56mm

123cm+276cm+187cm+27[illegible]cm+345cm

## 暗算教程ノ指導

**指導の要旨** 2位數と2位數との和を求むる暗算を指導する是は最も普通に利用されるものでもあり、暗算としても代表的のものであるから、十分練習をつむ必要がある。

**補充問題**

暗算デ次ノ寄セ算ヲシナサイ。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 34 | 38 | 73 | 78 | 30 | 45 |
| +65 | +17 | +72 | +92 | +93 | +71 |
| 150 | 440 | 530 | 307 | 408 | 120 |
| + 220 | + 260 | + 470 | + 507 | + 602 | + 280 |
| 125 | 250 | | | | |
| + 125 | + 250 | | | | |

## 桝目に付ての指導

**指導の要旨** 量を計る單位としてリットル・デシリットルを指導する。要點を列擧すれば次の如くである。

イ、量器の觀察

ロ、液體、穀類等を測る單位としてリツトル・デシリツトルを用ひること

ハ、1リツトル＝10デシリツトル

ニ、リツトル、デシリツトルの略字として *l*, *dl* 用ひること

ホ、實測と量器の使用法

**指導の要領** 1. 量の測定の必要、先づ量器の必要を體驗させる。——水とか砂とかの多い少いを問題として發展させて行く。

2. 量器の發展の概要を說く。——手のひらや、椀、鉢の類から發展して一定の量器が出來たことに說き及ぶ

3. 新量制と量器についての取扱をする——m, cm と連させて。

**指導の實際** 實測を主體として指導する。而して此の指導は當分繼續して行ふ。

先づリツトルの指導上より入り、次にデシリツトルを敎へる。

A リツトルの指導

イ、リツトル桝の提示

ロ、名稱及び單位の授與

ハ、量の測定——穀類、砂、及び水

ニ、略字の指導——略字の讀み方の練習、それから書き方の練習。書方の練習は次の樣にすると良い。(膠



寫刷りにして與へる)

次のりやく字のおけいこをしなさい。

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| l | l | l | l | l | | | | |
| l | l | l | l | | | | | |

B デシリツトルの指導

是はリツトルが十分理解されてから指導するがよい。

イ、リツトル桝で測れぬ小量を測定させて小單位の必要を體驗させる。

ロ、デシリツトルの指導とデシリツトル桝の提示、

1リツトル＝10デシリツトル

ハ、量の測定

ニ、略字ノ讀ミト書キ方ノ指導、書キ方ハ例ニ依ツテ次ノ樣ナ方法ヲトル。

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| dl | dl | dl | dl | | | |
| dl | dl | dl | | | | |

C *l* の場合に於ても *dl* の場合に於ても、上述の指導が終へたら、實地の問題或は補充の問題に依つて名數計算の練習をさせることにする。

**補充問題**

1. バケツニ水ヲ入レルニ、始メニ 27dl, 次ニ 45dl 入レタ。皆デ幾 l ニナルカ。

2. 次ノ寄セ算ヲシナサイ。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| l | dl | dl | dl | l |
| 369 | 503 | 1506 | 450 | 1632 |
| 180 | 296 | 903 | 1309 | 272 |
| 94 | 38 | 25 | 483 | +1466 |
| + 375 | + 425 | +3487 | +6715 | |

## 應用問題1の指導

**指導の要旨** 加法に關する應用問題を指導する。教師用書16頁の注意に、「應用問題ニ於テハ主トシテ算法ノ理由ヲ了解セシム可シ」と記し尙其他種々注意が出て居るが、是等の問題は又名數と言ふ見地から見れば其の一例とも見られぬ事はないし、計算と言ふ見地からして見れば筆算法の練習とも見られる。應用問題は以上の樣な種々な目的を持つて居るのであるから、指導者は教科書の問題を標準として兒童の生活的事實から成る可く多くの問題を捉へて作題などさせつゝ解決の指導をする事が望ましい。

**指導の要領** 教科書の應用問題としては是が最初であるから種々の基礎的訓練が要る。即ち先づ問題を讀んで題意を捉むこと。問題の要點——何を要求して居るかを判然認識するやうに仕向けなければならない。

さて此の手續が濟んだならば、次に問題より解式へ、解式より計算へ、計算より答の決定への手續を運び最後に答の吟味を行ふ習慣を作らなければならぬ。



應用問題の指導は單に形式的の陶冶にのみ重きを置く事なく良く其の問題の實質的方面の指導——數量に關する知識の指導に意を注がなければならぬ。

教科書の問題を分類して見ると次の如くである。

1. 錢目の問題……2 題
2. 日數の問題……1 題
3. 人數の問題……1 題
4. 桝目の問題……2 題
5. 長さの問題……2 題

上の分類に依つて明かなる如く、中々多方面に涉つて問題が出來て居る。從つて補充問題も兒童の卑近な生活的事實をもとにして各方面の數量知識を盛つた問題を提供しなければならぬ。即ち、

1. 錢目の問題としては、例へば、
   兒童の貯金、學用品代、運動用具代、鐵道賃金其他の貨調査表の利用、
2. 日數計算としては、
   出席簿、カレンダーの利用、
3. 人數に關する問題としては、
   學校の生徒數、工場の職工數、等の利用、
4. 桝目の問題としては、

桝を用ひて諸種の容器を測定し其の結果を利用する、

5. 長さの問題としては、

身體檢査表、動運競技のレコードの利用及び校舍、橋梁等の長さの測定及び其の結果の利用。

次に應用問題指導上の注意として一言する事にする。

元來兒童が應用問題を難解とするのは主として問題が讀みこなせないからである，即ち問題に於ける數量相互間の關係の認識が出來ないからである。從つて指導者に於ては力めて問題に含まれた數量の關係の如何を兒童に理解させるやうに注意しなければならない。

應用問題指導の着眼として、自分は次の4項を擧げて置く。

イ、問題中より必要な條件（數量）を選出して其の間の關係を見ること

ロ、算法を工夫すること

ハ、式を立てゝ思考過程を明示すること

ニ、正しく、早く計算すること

**補充問題**

1. 君等ガ三年ニナル時ニ買ツタ教科書ノ値段ヲシラベナサイ。皆デ幾ラデスカ。

國語讀本卷五(　　)

算　術　書(　　)

修　身　書(　　)



書方手本上卷(　　)

2. 3月ハ幾日アルカ。4月、5月、6月、7月ハソレゾレ幾日アルカ。皆デ幾日ニナルカ。ワカラナイ人ハカレンダーヲ見ナサイ。

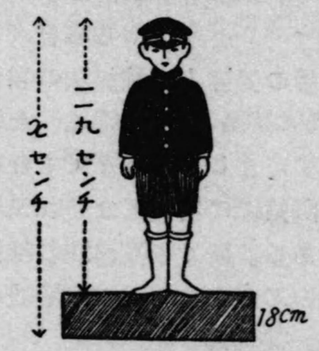
3. 僕等ノ學校ニハ男生ガ 279人、女生ガ 269人、先生ガ17人居ル。皆合セルト幾人ニナルカ。

4. 當番ニ使フバケツニ水ガ幾 $l$ ハイルカ測ツテゴランナサイ。

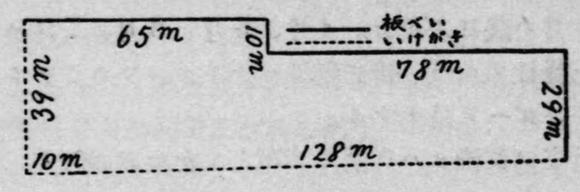
5. 一郎サンハ水イタヅラヲショウト思ツテタラヒニ水ヲ入レマシタ。ハジメハ72 $l$，次ニ 23 $l$ 入レマシタ。タラヒニ幾 $l$ ハイリマシタカ，

6. 僕ノ貯金ハ去年ノ終リニハ7圓60錢デアツタ。才正月ニ2圓50錢入レ、又三月ニ1圓30錢アヅケタ。皆デ幾ラニナツテキルカ。

7. 右ノ繪ヲゴランナサイ。コノ生徒ハ下カラドノ位ノタカサガアルカ。




8. 次の圖の板べいの長さは何ほどですか。又いけがきの長さは何ほどですか。




筆算減法の指導

**指導の要旨** 筆算減法につき指導する。教程の內容を示せば概略次の如くである。——教科書の配列——

1. 減法 1. 各桁別々に引き得る場合
2. 減法 2. 1桁引き得ぬ場合
3. 減法 3. 2桁以上引き得ぬ場合
4. 減法 4. 或桁より1を借來らんとする時其の桁に0ある場合

指導の要旨も大體加法の場合と大差はない。

**指導の要領** 加法の時述べた樣な要領で發生的、構成的に指導す可きこと言ふまでもない。

實際指導に當つては是れ又卑近な事實問題より導入す可きである。斯く筆算減法の地位を提出して置いて、兒童に解決の工夫をさせてから形式の指導へと發展させる事にし度い。

指導の要點は

イ、各數の桁を縱に揃へて書く手續



ロ、差を表はす手續——横線と減號。

ハ、計算過程の吟味——1の位より部分差を求めて其の都度書いて行く。

尤も(ハ)の研究に相當する部分がむづかしいのでこれも教科書には數種に分類してあるから、大體それに從つて指導して行くとよい。

さて加法に於ては數を一度に幾つも加へる事が出來たが、減法に於ては二數に限られて居る事を注意して置く必要がある。

又減法の檢算法として次の事柄を指導する。

1. 減數＋殘り＝被減數
2. 被減數－殘り＝減數

以上の教程の指導に先立つて加法の場合の如く、次のやうな問題を課し、兒童の能力、缺陷の如何を一通り調査して置かねばならぬ。

次ノ暗算ヲシナサイ。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| I. | 11－9＝ | 12－7＝ | 13－4＝ | 15－6＝ |
| | 14－5＝ | 11－2＝ | 12－4＝ | 16－8＝ |
| | 17－9＝ | 14－7＝ | 11－3＝ | 13－6＝ |
| | 16－9＝ | 11－7＝ | 14－6＝ | 11－5＝ |
| | 12－5＝ | 12－3＝ | 17－8＝ | 11－4＝ |
| | 13－5＝ | 15－9＝ | 11－8＝ | 14－9＝ |
| | 12－6＝ | 16－7＝ | 12－9＝ | 15－7＝ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 11−6= | 13−9= | （以上一分間） | |
| II. | 94−10= | 87−81= | 88−83= | 82−20= |
| | 77−73= | 70−64= | 55−49= | 78−30= |
| | 66−64= | 63−53= | 44−30= | 64−40= |
| | 60−55= | 59−55= | 50−46= | 33−26= |
| | 55−10= | 48−46= | 46−20= | 30−28= |
| | 44−30= | 60−13= | 40−37= | 22−14= |
| | 46−20= | 37−31= | 30−28= | 92−83= |
| | 37−20= | 26−22= | （以上二分間） | |

## 減法1の指導

**指導ノ要旨** 各桁別々に引き得る場合の減法を指導する。尤も此處では只筆算減法の形式を授けて、理解させれば足りるのである。即ち

**例題** 一郎サンノ學校ニハ生徒ガ697人居マス。其ノ中352人ハ男生デス。女生ハ幾人デスカ。

A 導入ノ仕方

イ、一郎サンノ學校ニハ生徒ガ幾人居ルカ。又男生ハ幾人カ。

ロ、問題ハ何ヲ尋ネテキルカ。

ハ、ドウスレバ解ケルカ。運算ノ仕方ヲ工夫シナサイ

B 式ト計算、

697人−352人=345人



```
    人
  697
− 352
  345  答 345人
```

1. 位ヲ揃ヘテ書クコト、
2. 上ノ數カラ下ノ數ヲ1位カラ順ニ引イテ書イテ行ク。

C 驗算法

```
イ.   352      ロ.   345      ハ.   697
    + 345          + 352          − 345
      697            697            352
```

注　意

練習問題の提出法については「加法1」の注意の條を參照されるとよい。

**補充問題**

1. 次ノ引キ算ヲシナサイ。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 4538 | 8457 | 3767 | 6435 |
| −3316 | −6445 | −1664 | −3225 |
| 6453 | 4763 | 6341 | 5498 |
| −3251 | −3553 | −3241 | −3264 |

2. 次ノ計算ヲシナサイ。

594−263　　874−672

8896−4715　　6845−4723

## 暗算教程の指導

**指導の要旨** 各桁別々に引き得る場合の減法に關する暗算、これは減法の最も簡單なる形であるから何れでも直に暗算で解決出來るまでに指導したい。（聽暗算は始めは無理で

あるが。)

**補充問題**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 錢 | 錢 | 圓 | 円 | 枚 | 枚 |
| 95 | 87 | 89 | 97 | 57 | 36 |
| −60 | −20 | −36 | −52 | −33 | −31 |
| m | m | cm | cm | dl | dl |
| 880 | 840 | 780 | 780 | 303 | 202 |
| − 680 | − 640 | − 570 | − 330 | − 201 | − 101 |

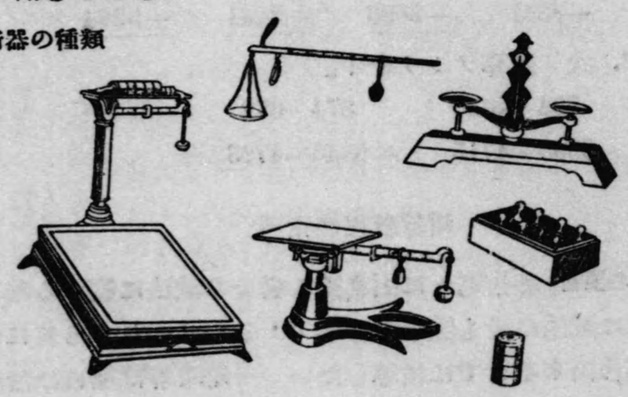
## 目方に關する指導

**指導の要旨** 重さを表はす單位としてキログラム、グラムを指導する。要點を列擧すれば次の如くである

イ、衡器の觀察、

ロ、物の重量を測る單位としてキログラム、グラムを用ひること、

**衡器の種類**





ハ、1キログラム=1000グラム

ニ、キログラム、グラムの略字として gk, g を用ひること、

ホ、實測と量器の使用法、

**指導の要領** 1. 目方の測定の必要、衡器の必要を體驗させる。——方法は量の測定の場合に準ず。

2. 衡器の種類の概要——天秤、桿秤、臺秤、自動秤等種々の衡器を示す。

3. 新衡制と衡器について取扱ふ——l, dl と關連させて

**指導の實際** 是又實測を主體とし適當の期間取扱を繼續す可き事言ふ迄でも無い。先づキログラムの指導から入ることにする。

A キログラムの指導。

イ、キログラム秤の提示。

ロ、名稱及び單位の授與。

ハ、量の測定……1キログラム、2キログラム等の砂か何かは入つた袋を作らせて、時々それを手にのせて試みさせると重さの觀念が直に養へる。

ニ、略字の指導——讀方の練習それから書き方の練習書き方は例に依つて次の方法をとる。

次のりやく字をけいこしなさい。(謄寫刷にする)

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| Kg | Kg | Kg | Kg | | | |
| Kg | Kg | Kg | Kg | | | |

ホ、名數計算の練習——補充問題參考

B　グラムの指導。

キログラムの觀念がすつかり頭に入つた頃補助單位の必要を痛感させて、然る後このグラムの指導に入るやうにする。

イ、1キログラムに足りない物を測定させて小單位の必要を體驗させる。

ロ、グラムの指導。1キログラム＝1000グラム。

ハ、量の測定。

ニ、略字の指導——讀みと書き方。

次のりやく字をけいこしなさい。(謄寫刷にして渡す)

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| g | g | g | g | g | | | | |

備　考

量の場合もさうであるが目方の觀念は殊にはいり難いから長い間測定を繼續させ、時々筋肉にうつたへて目方を當てる事をさせるとよい。

自分は次の様な作業を二週間ばかり繼續させた事があるが大變有効であつた。



僕のハイノウの重さ760g
僕の鍬の重さ1200g
僕の帽子の重さ95g
僕の算術書の重さ110g
僕の讀方の本の重さ195g
僕の國語讀本の重さ185g
僕の體重24300g

| 僕のお荷物全部の重さ | 何　某 |
|---|---|
| 5月21日　土曜日 | 2660g |
| 5月26日　木曜日 | 2715g |
| 5月27日　金曜日 | 1810g |
| 5月30日　月曜日 | 2650g |
| 5月31日　火曜日 | 2550g |
| 6月1日　水曜日 | 2310g |
| 6月2日　一週間の總計 | 14695g |

說明　これは問題にあたる部分だけを謄寫刷りにして右を空欄にして與へ各自に測定の上記入せしめたものである。

下の荷物の重さは毎日朝來た時に測定させたのである。

補充問題

1. 君ノ目方ハ幾gカ。身體檢査表ヲ見ナサイ。
2. クラスデ一番目方ガカヽルノハ誰カ。又幾gアルカ又1番輕イ人ハドウカ。

3. 次ノ引キ算ヲシナサイ。

| kg | kg | g | g | g |
|---|---|---|---|---|
| 930 | 1234 | 6432 | 2501 | 7340 |
| − 600 | −1024 | −4412 | −1500 | − 340 |

## 六月の指導

### 減法 2 の指導

**指導の要旨** 一桁引き得ぬものある場合の減法を授ける。部分計算に當つて或桁の被減數が減數より小なる場合、上位より數を借りて來る手續を呑み込ませるのが主眼である。兒童の誤も多くは此處に胎胚する。注意す可き事である。

**例題** 花子ノ家カラ學校マデハ 543m, 一郎ノ家ハ其ノ途中ニアツテ學校マデ 325m アル。ソンナラ花子ノ家ト一郎ノ家トハ幾mハナレテ居ルカ。

A 導入ノ仕方

イ、問題ハ何ヲ尋ネテ居ルカ。

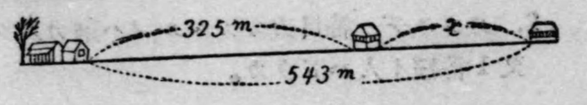
ロ、花子ノ家カラ學校マデハ幾mカ。

ハ、一郎ノ家カラ學校マデハ幾mカ。

ニ、ドウスレバ解ケルカ。

B 解キ方ト説明

圖解






演算　式 543m−325m=218m

| m |
|---|
| 543 |
| − 325 |
| 218 |

1. 1ノ位デ3カラ5ハ引ケヌカラ次ノ位カラ10借リテ來テ13カラ5引クト8ニナル。
2. 10ノ位ハ30ニナツテキルカラ、30カラ、引イテ10殘ル。
3. 100ノ位ハ 500カラ 300引カラ 200。

**補充問題**

1. 次ノ引キ算ヲシナサイ。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 4 38 | 8457 | 3767 | 6334 |
| −2316 | −6435 | −1663 | −3214 |
| 6452 | 4763 | 6341 | 5498 |
| −3251 | −3553 | −3241 | −4275 |

2. 次ノ引キ算ヲシナサイ。

294−137　928−621　873−808

436−382　9369−2703　3098−2590

三千七百五十四引ク二百八

一千二百三十九引ク五百三十六

3. 次ノ引キ算ヲシナサイ。

| 円 錢 | 円 錢 | 円 錢 | 円 錢 |
|---|---|---|---|
| 845 | 9605 | 8456 | 6755 |
| − 229 | −7060 | −2190 | −3720 |

| cm | m | mm | l |
|---|---|---|---|
| 8652 | 5327 | 8653 | 7068 |
| −8481 | −3275 | −8482 | −4638 |

| dl | g | kg | kg |
|---|---|---|---|
| 380 | 4075 | 5635 | 7062 |
| − 157 | −3905 | −3172 | −2047 |

暗算教程の指導

**指導の要旨** 二位數から二位數を引く問題の中、1桁引き得ぬ場合のものでも、此處に掲げた位の問題は暗算で解決されなければならぬ。

**補充問題**

| 錢 | 錢 | cm | g | dl |
|---|---|---|---|---|
| 56 | 90 | 82 | 156 | 168 |
| −18 | −46 | −35 | − 84 | − 84 |

| l | kg |
|---|---|
| 104 | 209 |
| − 52 | − 51 |

減法3の指導

**指導の要旨** 二桁以上引き得ぬものある場合——但し借來らんとする桁0なる場合を除く——の減法を指導するのである。是は前の場合に比して誤謬の危險率が一層多くなるわけである。

やはり上位の桁より數を借りて來ると言ふ手續きと、其の借りた數を記憶して置く事に注意すればよい。



**例題**

| イ. m | ロ. l | ハ. g |
|---|---|---|
| 6345 | 635 | 3421 |
| −1528 | − 137 | −1563 |
| 4817 | 498 | 1858 |

**說明** 演算の形式は要するに前の場合より一層複雜になつたと言ふだけのもので改めて述べなければならぬ程の事もない。以上の例の中、

イ、は只二桁引く事の出來ぬものある場合である。

ロ、は或る桁に於て其の被減數と減數は相等しきも。前に借りられた數がある故に引き得ぬ場合である。

ハ、は三桁引き得ぬものある場合である。實際の指導は「減法2」の場合と比較しつゝ是に準じて行ふ可く、煩を避けるため此處には省略して置く。

**注　意**

說明(ロ)に擧げた樣な或桁に於ける被減數と減數が相等しきも、前に借りられてある爲に引き得ぬ場合の減法は中々兒童の間違ひ易いものであるから十分練習をつまなければならぬ。

又三桁引き得ぬものある場合も、兒童はよく前に借りた事を忘れてしまふからよく記憶するやう習慣づけなければならぬ。

**補充問題**

1. ——(イ)ノ場合

| | | | |
|---|---|---|---|
| 3147 | 754 | 2345 | 4785 |
| −1629 | − 268 | −1087 | −3847 |

5550−4279　　4678−1983

3876−2967　　5047−3238

2. ——(ロ)ノ場合

| | | | |
|---|---|---|---|
| 456 | 840 | 3220 | 4398 |
| − 358 | − 249 | −1027 | −3099 |

7350−2360　　748−249　　2347−1357

9535−9437　　3886−2783　　8327−8028

5138−4839　　7350−5580

3. ——(ハ)ノ場合

4345−1456　　9312−6363　　5240−3245

1210−655　　5436−2938　　7367−6369

7524−3765　　4163−2167　　1826−939

1513−568　　1383−789　　2340−876

## 暗算教程の指導

**指導の要旨**　3位數から2位數を引いて2位數が殘る場合の暗算を指導する。初めは稍困難に感ずるかもしれぬが此の程度の減法は常に暗算にて解決し得るやう、平生から訓練することが肝腎である。

**補充問題**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 175 | 125 | 193 | 165 | 111 |
| −93 | − 57 | − 84 | − 86 | − 59 |



| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 150 | 200 | 410 | 420 | 350 |
| − 74 | − 59 | − 305 | − 205 | − 290 |
| 830 | 700 | 1000 | 950 | |
| − 560 | − 125 | − 750 | − 435 | |

## 減法4の指導

**指導の要旨**　或桁より1を借りて來ようとした時、其の桁に0ある場合の減法を授ける。

**例題**

503
− 136
367

3カラ6ハ引ケ無イカラ、10ノ位カラ借リヨウトスルガ10ノ位ガ0デアルカラ、100ノ位カラ10ノ位ヘ100ダケ借リテ來其ノ100カラ1ノ位ヘ10ヲカシ、13カラ6ヲトル。次ニ90カラ30ヲトル、……

**注　意**

此の形の問題は兒童の最も困難とするものであるから十分注意して指導しなければならない。

此の指導に先だつて次のやうな基本的練習を課す必要がある。即ち

100−6　　500−6　　503−6　　503−36

と言ふやうな過程を經て

503−136　の如き問題の指導に移るとよい。斯うした過程をしつかり理解させれば上の説明も左程困難でなくなるはずである。

**補充問題**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 306−7 | 403−86 | 702−514 | 700−4 |
| 500−37 | 603−298 | 105−7 | 108−79 |
| 400−342 | 100−95 | 404−393 | 9017−536 |
| 7000−508 | 2000−1919 | 6000−5093 | |

### 暗算教程の指導

**指導の要旨** 上の場合に於ける減法の簡單なるものについての暗算を指導する。

**補充問題**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 80 | 105 | 100 | 106 | 210 |
| −17 | − 51 | − 25 | − 96 | − 39 |
| 450 | 700 | 600 | 909 | 720 |
| − 280 | − 350 | − 380 | − 405 | − 405 |
| 500 | 200 | | | |
| − 125 | − 175 | | | |

### 名數計算の指導

**指導の要旨** 單位間に十進關係を有する名數の減法について指導する。

是は要するに被減數と減數とが單位を異にする時は其の高き方に0を補つて、低い方と同單位にして計算す可きものなる事を理解させればよいのである。



**例題** 一郎サンハ5圓貯金シテアツタガ、今度グラブヲ買フノニ3圓68錢引キダシタ。マダ幾ラ殘ツテ居ルカ。

**解法** 5圓−3圓68錢=132錢

| 円 | 錢 |
|---|---|
| 5 | 00 |
| − 3 | 68 |
| 1 | 32 |

1圓ハ100錢デアルカラ5ガ100ノ位ニ行クヤウニ10ノ位ト1ノ位ニ0ヲ補フ。

**補充問題**

次ノ計算ヲシナサイ。

| | |
|---|---|
| 3圓−1圓68錢 | 15圓−4圓15錢 |
| 30m−1050cm | 50m−3708cm |
| 12cm−89cm | 22cm−107mm |
| 100l−512dl | 120l−753dl |
| 670l−938dl | 360l−1985dl |
| 5kg−2370g | 3kg−1991g |

## 七月の指導

### 應用問題2の指導

**指導の要旨** 減法に關する應用問題を指導する。

**指導の要領** 例に依り教科書の問題を分類して見ると、

1. 錢目の問題……1題
2. 長さの問題……4題

3. 桝目の問題……2 題
4. 目方の問題……1 題
5. 人數の問題……1 題

以上の如く量の性質上から見ると相當多方面に渉つて載せてあるが數計算の上から言ふと、今までに收得した所の算法は殆ど皆適用するやうになつて居るとは言へ何れも數範圍小さく、殆んど總てが暗算で出來る程度のものである。——此の程度のものは立式、答を暗算で解決させたい——從つて補充問題としてはも少し廣汎な數を使つた事實算を課す必要がある。

又補充問題を提出するに當つては算法の起る理法の上から見て引き算としてのあらゆる形式を網羅するとまでには行かないとしても

イ、殘りを求めるもの、
ロ、釣錢を求めるもの、
ハ、風體と正味に關するもの、
ニ、差を求むるもの、
ホ、逆思考のもの、
ヘ、二數の中の大なる數と差を知りて小なる數を求むるもの、

位は解かせて見たいものである。

解題の指導については既に應用問題1に述てあるから此處では省いて置くが、補充問題の構成につき一言して置き度



い。

補充問題は矢張、兒童の數量生活に根ざしたものを兒童と一所になつて構成する事にし度い。

自分は問題構成の資料を得る爲に次の如き「數量調査表」を渡して、兒童に時々調査の結果を記入させ、それを基にした作題の指導をして居る。例へば

錢目の問題については

學用品の値段調べ

| 品名 | | 價額 | 品名 | | 價額 |
|---|---|---|---|---|---|
| 國語讀本 | 1冊 | 13錢 | ノート | 1冊 | 10錢 |
| 修身書 | 〃 | 9錢 | 筆入 | 1個 | 35錢 |
| 算術書 | 〃 | 9錢 | 物差シ | 1本 | 15錢 |
| 尋常小學唱歌 | 〃 | 10錢 | 紙はさみ | 1個 | 36錢 |
| 書方手本 | 〃 | 5錢 | 背嚢 | 1個 | 3圓50錢 |

上の表を基として背嚢より紙はさみの方が幾ら安いか、とか、皆買つて10圓札を出したら幾ら釣錢が來るかと言つた樣な問題を構成して解かせるのである。

長さの問題としては、身體檢査の結果でも利用して、

| 姓　名 | 身　長 | 姓　名 | 身　長 |
|---|---|---|---|
| 井　上 | 126cm | 黒　田 | 112cm |
| 和　田 | 115cm | 瀬　川 | 114cm |
| 藤　原 | 122cm | 關　口 | 121cm |
| 中　野 | 119cm | 鈴　木 | 117cm |
| 小　林 | 128cm | 山　本 | 130cm |

此の表に依つて

1. 誰ガ一番高イカ、又誰ガ一番低イカ。
2. 二人ハ何程チガフカ。
3. 井上君ハ鈴木君ヨリ幾 cm 高イカ。
4. 先生ハ 165cm デアル、先生ト和田君トハ何程チガフカ。

上述の様な問題を取扱ふと中々有効である。此の他統計年鑑や新聞等を利用すればずゐぶん面白い學習が出來る筈である。

注　意

兒童に問題を構成させるについて、教師は常に數理的價値の有無と、兒童の數量生活に即して居るかどうかに留意しなければならぬ。例へ生活に即した問題でも「國語讀本ハ書方手本ヨリ幾ラ高イカ」式の問題ばかり扱つて居たのでは何時になつても兒童の數量生活は深まらない。



補充問題

1. 一郎サンハ優等生ノ讀本ヲ85錢デ買ッテ、5圓札ヲ出シタ。幾ラオ釣ガ來ルカ。
2. 長サ 160cm ノ紐ガアル。其ノ中カラ 58cm 切リトルト、後ニ幾 cm ノコルカ。
3. 一郎ノ家デハ昨日オ米ヲ 3 l 食ベマシタ。今日ハ昨日ヨリ 3dl 少ク食ベマシタ。今日ハオ米ヲ何程食ベマシタカ。
4. 一郎サンノ今日ノ學校ノオ荷物ノ目方ハ 2310g アッタ。其ノ中背嚢ノ重サハ 765g デアル。オ荷物ノ正味ノ目方ハ何程アルカ。
5. 花子サンノ體重ハ 2340g, 弟ハ 2150g デス。二人ノ體重ハ何程チガフカ。
6. 一郎サンハ身長ガ 136cm アル。弟ハ一郎サンヨリ 28cm 低イ。弟ノ身長ハイクラカ。
7. 日本第一ノ高山ハ臺灣ノ新高山デ 3950m アル。又富士山ハ日本第四ノ高山デ 3778m アル。富士山ハ新高山ヨリ幾m低イカ。
8. コノ子ハ算術ヲシテヰマス。コノ子ノ机ノ高サハ何ホドデスカ。又コシカケハ机ヨリ何ホドヒクイ

カ。

9. 僕ノ學校ノ一年生ト二年生ト三年生ヲ合セルト皆デ264人デス。其ノ中、一年生ト二年生デ172人ニナル。三年生ハ幾人カ。

## 復習1の指導

**指導の要旨** 加減に關する計算の復習をする。第一學期に於ける主要な教程は言ふ迄もなく筆算加法及び減法の活用及び練習を眼目とする。

今第一學期の教程を一通り學習し終つたので教科書は此處へ複習を課したのである。

復習とは一度學習した事を只其の儘繰り返すと言ふ事ではない。後をふり返つて反省すると同時に、力を練り、之を運用することである。此の活用の如何に依つて第一學期の學習の最後の收穫に著しい相違が出來るのである。

**指導の要領** 大體教科書の順に一通り計算させて見る。一通りやらせて兒童の傾向をみて次のやうな方法に依つて再三兒童の能力を練つてやりたい。

1. 一定の問題——例へば4.とか7.とか——を時間と確度の標準に依つて計算させる。
2. 間違ひ易い問題又は比較的困難な問題につき念入りに指導する——補充問題も提出して。
3. 質的取扱と言ふよりは寧ろ量的取扱を採る。是は復



習であるから、小々の違ひは氣に留めず、寧ろ進んで多くやらせるに限る。

**特に練習を要する教程**

イ、二桁以上引き得ぬものある場合の減法。

ロ、或桁より1を借りようとする時其の桁に0ある場合の減法。

ハ、加減混合の問題。

**注　意**

1. 問題は時々名數計算或は應用問題の形式として提出すること。
2. 練習を要する問題は反覆練習させ、又適當に前の頁の問題を選出して課すこと。

**補充問題**

1. 次ノ引キ算ヲシナサイ。

| | | |
|---|---|---|
| 768−369 | 457−358 | 3679−1685 |
| 9237−8253 | 4244−1355 | 7401−2393 |
| 3236−1377 | 9312−6373 | |

2. 次ノ引キ算ヲシナサイ。

| | |
|---|---|
| 7800−274−166 | 9374−5531−65 |
| 205−42−15 | 350−78−16 |
| 954−106−756 | 5361−754−2886 |
| 700−235−407 | 4321−1234−1345 |

3. 次ノ計算ヲシナサイ。

1467+2440−1066　　9007−7512+2462

1567+1110−2403　　2530−125+367−1645

5352−3630+364−2201

4200−2098−162+854−756

1346+507+87+9+2567

28+455+1278+38+2056

4. 次ノ計算ヲシナサイ。

4圓48錢+12圓5錢+4圓80錢

10圓15錢−5圓60錢−4圓9錢

3圓5錢−2圓76錢+2圓59錢

8m+76cm+157cm+3cm

10m−3m−347cm+177cm

556dl−302dl+150dl+999dl

30l+135l+306dl−9l−7dl

3kg+302g−1299g+12g

7530g−3352g+2780g−3kg

5. 次ノ計算ノ中ノ△ニチヤウドアテハマル數字ヲ書キ入レナサイ。

$$\begin{array}{r} 266 \\ -18\triangle \\ \hline 78 \end{array} \qquad \begin{array}{r} 123 \\ +21\triangle \\ \hline 342 \end{array} \qquad \begin{array}{r} 5\triangle 8 \\ -36\triangle \\ \hline 155 \end{array} \qquad \begin{array}{r} 3\triangle 5 \\ +27\triangle \\ \hline 632 \end{array}$$

## 應用問題3の指導

**指導の要旨** 加減に關する應用問題を指導する。是は「復習



1」と相俟つて第一學期の總復習を目的として居るばかりでなく、加減に關する應用問題の綜合的解題力を涵養する事が眼目となつて居る。

**指導の要領** 1. 上述の如き目的を持つて居るのであるから加減に關する算法を單に其れ自身としてゞなく、一つの問題を解決するに及んで其れ等の算法を種々利用工夫すると言ふ自覺を持つて學習させなければならぬ。

2. 教科書の問題については充分注意して數量知識を擴張してやるかたはら「應用問題2」の場合に述べて置いたやうな方法に依つて種々事實問題を提出して能力を練磨してやらなければならない。

3. 此の問題のやうに稍複合的になつて來た時には、立式の指導に最も好都合である。

**補充問題**

1. 本ノ目方ヲ測ツテ見タラ次ノ通リダツタ。皆デ何程カ。

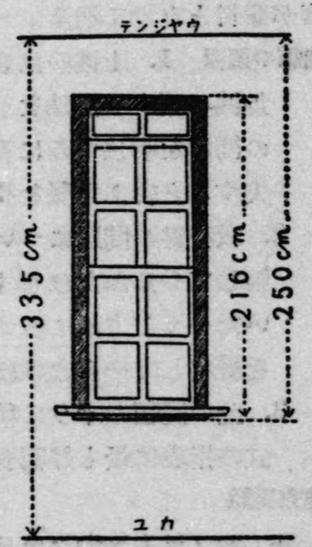
| | |
|---|---|
| 修身書 | 83g |
| 算術書 | 110g |
| 國語讀本 | 185g |
| 書方手本 | 35g |

2. 算術書ハ皆デ81頁アル。今日デ31頁マデ學習ガスンダ。後何頁殘ツテヰルカ。

3. 米ビツニ米ガ72lハイツテ居マシタガ、初メニ

295dl 次ニ 35dl 出シマシタ。後ニマダ幾dl ノコツテ居ルカ。

4. コノエノマドトユカトノ間ハ何ホドアリマスカ。




テンジヤウトマドトノ間ハ何ホドアリマスカ。

50cm ノ高サノ机ガアリマスト、机カラマドノ上ノハシマデ何ホドデスカ。

5. 洋品店デ1圓45錢ノ海水着ト45錢ノ海水帽トヲ買ツテ、5圓札ヲ出スト幾ラオ釣が來ルカ。

6. 桃ガ8ツアツタ。ソコヘ叔母サンノトコロカラ10モラツタノデ、オトナリヘ15ヤツタ。マダイクツノコツテキルカ。

7. 僕ノ組ノ生徒ハ入學スル時42人キタガ、其ノ中3人ヨソヘ行キ、別ニ11人ハイツテ來タ。今ハ幾人キルカ。



8. セイクラベヲシタ。一郎サンハ二郎サンヨリ9cm 高ク、三郎サンハ二郎サンヨリ6cm ヒクカツタ。二郎ノセイハ135cm デアルト、

イ、一郎ハイクラカ。

ロ、三郎ハイクラカ。

ハ、一郎ハ三郎ヨリイクラ高イカ。

9. 今度ノ遠足デ 10km ハナレタ川邊ニ行ツタ。行キニハ 4km 電車ニ乘ツテアト歩キ、歸リニハ 8km 電車ニ乘ツテ殘リヲアルイタ。歩イタ道ノリ何程カ。

## 九月の指導

### 暗算2の指導

**指導の要旨** 本學期の主要教程たる筆算乘法の基礎として前學年に授けた掛算九々の練習と、0に關する掛け算の補習をする。

**指導の要領**

九々の練習

これは反射的に出て來る樣になつて居なければ本學期の筆算乘法に到つては物にならない。故にこゝでは今迄に十分練習はつんで居ると思ふが念の爲に今一度まとめて復習するのであつて、決して泥繩式の意味に解してはな

らない。若し此の期に及んで尙九々が不完全なものがあつたら、刻下に之を救濟しなければならぬ。

九々の練習は今後も繼續的に練習させてほしい。

**取扱の實際** 一郎サンハ4人兄弟デス。仲ヨク遊ンダノデ御母サンガ皆ニ蜜柑ヲ3ツヅツ下サイマシタ。ミンナデ幾ツデスカ。

九々ノ呼聲ヲカケテ計算サセル。

3×4=12　　3·4ノ12

**補充問題**

次の問題は教科書の補充に充てたものである。時々例題の樣な形として提出するが良い。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 4×6 | 3×2 | 5×3 | 6×2 | 7×7 | 3×1 |
| 1×7 | 2×4 | 4×1 | 1×2 | 1×5 | 2×2 |
| 2×6 | 2×8 | 6×1 | 4×2 | 2×1 | 4×4 |
| 9×3 | 1×3 | 4×3 | 9×2 | 6×6 | 4×7 |
| 2×3 | 5×4 | 6×7 | 1×9 | 5×2 | 8×2 |
| 7×1 | 5×1 | 7×9 | 4×9 | 3×5 | 8×4 |
| 9×5 | 9×8 | 1×6 | 6×4 | 2×7 | 2×9 |
| 8×1 | 3×8 | 7×5 | 7×3 | 6×3 | 5×9 |
| 4×5 | 1×8 | 3×3 | 9×1 | 7×4 | 8×6 |
| 4×8 | 2×5 | 9×7 | 7×6 | 9×9 | 5×6 |
| 3×7 | 8×3 | 3×9 | 3×4 | 8×5 | 9×4 |



| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 3×6 | 5×5 | 7×2 | 9×3 | 6×9 | 5×7 |
| 7×8 | 6×5 | 8×7 | 1×1 | 8×8 | 5×8 |
| 9×6 | 8×9 | | | | |

**指導の要領** 零に關する掛算九々

此の場合に限らず、凡て新しい教程の學習に入る場合には先づ徐ろに意味の理解といふ事に力を注がなければならぬ。徒に先を急いで一知半解の知識に甘んじて進む時は反つて進度が後れるばかりでなく、全く無意義な學習に終つて了ふ。

零に關する掛算九々の場合に於てもさうである。「零を何倍しても零である」とか「どんな數を零倍しても答は零になる」とか抽象的に天下り式に教へるやうな事なく、良く意味を理解させて指導するやうにしなければならない。

**取扱の實際** 1. 零ノ何倍。

掛算ハ元來同數累加ノ略算法デアル處カラ出發スル。

即チ

3×2=3+3=6　　3×3=3+3+3=9

此レト同樣

0×2=0+0=0　　0×3=0+0+0=0

呼ビ聲ハ矢張　0×2ハ「二零0」又ハ「二零ガ0」

0×3ハ「三零0」又ハ「三零ガ0」

2. 或數ノ零倍

或數ヲ0倍スルコトハ其ノ數ヲ集メナイ事デアル。即

チ

3×3=3+3+3=9

3×2=3+3=6

3×1=3

3×0=0……3ガ1ツモヨラナイカラ。

呼聲ハ 3×0 ハ「零三0」又ハ「零三ガ0」

**補充問題**

0×2　2×0　7×0　0×4　4×0　0×5

0×8　9×0　1×0　6×0

## 筆算乘法の指導

**指導の要旨** 乘法が累加の簡便法であると言ふ事は兒童は已に理解して居る筈である。

併し筆算乘法は未習の新事實なのであるから、導入の仕方については細心の注意が必要である。

**指導の要領** 乘法形式も加法の其れの如く、今日の完成を見る迄には發生的に幾變遷を經て居るのであるから、教科書所載の形式に至る迄の過程を一通り經驗させる事が必要である。

例へば（乘法一）の例題で

314×2=314+314=628



```
  314
+ 314
  ---
    8……4+4=4×2
   20……0+10=10×2
  600……300+300=300×2
  ---
  628
```

そこで 314×2 は

```
  314
×   2
  ---
    8……4×2
   20……10×2
  600……300×2
  ---
  628……314×2
```

これは即ち

```
  314
×   2
  ---
  628
```

斯様に合理的に説明すれば飛躍する所がないから、兒童にも良く理解する事が出來る筈である。

又以上の形式を暗算より導かうとするならば次のやうにすればよい。即ち、

```
  314                    314
×   2                  ×   2
  ---                    ---
  600……300×2            8……4×2
   20……10×2     →     20……10×2
    8……4×2             600……300×2
  ---                    ---
  628……314×2            628……214×2
```

但し此の時加法に於ては項の順を更へて加へても價が變らない事を説明する必要がある。

又例へ形式算の學習であつても、始めから形式一點張りに指導する事はよくない。何の爲に習ふか。どうしてさうす

る方がよいかを覺らしめなければならない。必要の原理と價値の原理が學習の根本であるからである。

從つて實際指導に際しては先づ兒童について、

1. 乘法は如何なる場合に成立するか。
2. 乘法の意味はどうであるか。
3. 筆算乘法の方法はどうすればよいか。

の諸問題に當面させて、工夫を凝らせる樣にしたい。

導入の方法としては加法の場合の如く、

1. 卑近な事實問題に依て筆算乘法の地位を提出する。
2. 算式の工夫。
3. 兒童の工夫に基づく指導。

の段階をとりたい。

尙筆算指導に入るに先だつて、一渡り乘法に關する旣習事項を追想しなければならぬ。

1. 乘算九々の唱へ方。
2. 何十と言ふ數に基數を掛けるもの。
3. 10倍、100倍と言ふこと。
4. 二位數に基數を掛けて上位に繰上らないもの。
5. 同上上位に繰上るもの。
6. 三位數に基數を掛けて上位に繰上らないもの。
7. 以上の逆計算に依つて、積より反對に因數を見出すもの。

以上の中一番大切なのは何と言つても乘算九々であるから



指導者は豫め之についての能力を調査して、其の缺陷を救濟してかゝらなければならない。

是が出來たら形式算の指導に入る。指導の實際例は次に揭げるから、此處には省略して、練習上の着眼を述べて見よう。練習題の分量は一般的に言つて少く課すよりは多い方がよい。教科書にも可成載つて居るが十分とは言へないから、補充問題に依つて練習を積む可きである。練習上の注意としては、

1. 合理的（理解的）方法から器械的練習へ導くこと。
2. 器械的練習には確度の他に速度も要求すること。但し始めは確實を旨とすべきこと。

の條項がある。

## 乘法1の指導

**指導の要旨** 各桁繰上らぬ場合を擧げて基數を掛ける仕方を授ける。

**筆算乘法の地位の提出** 1. 312+312+312……ヲ早ク計算スルニハドウスレバヨイカ。(312×3)

2. 12+12+12+12……ヲ早ク計算スルニハドウスレバヨイカ。(12×4)

3. 11×7……ハドンナ意味カ。

**例題** 道ノ兩側ニ櫻ノ木ガ 314本ヅツ植エテアル。皆デ幾本デスカ。

此の問題をどう解決するか、兒童に工夫させて見る。暗算で解決するものもあらうし、又寄せ算でやるものもあらう。併し結局乘法でやる方が簡單である事を說き次の形式を指導する。

314本×2=628本

```
   本
  314
×  2
  628
```

算法の說明は旣に理論の所に例示してあるから重復を避ける爲省略する。

**補充問題**

1. 筆一本ノ代ガ12錢デアルト、3本デハ幾ラカ、又4本デハ幾ラカ。
2. 42人ノ組ガ2組アル、皆デ幾人カ。
3. 一箱ニ蜜柑ガ 120個ハイツテ居ル、4箱デハ幾ツニナルカ。
4. 一列ニ兵士ガ12人ヅヽ並ンデヰル、4列デハ幾人居ルカ。
5. 230ページアル本ガ3冊アル、皆テ幾ページニナルカ。
6. 次ノ計算ヲシナサイ。

| | | |
|---|---|---|
| 2圓24錢×2 | 32錢1厘×3 | 12cm×4 |
| 442m×2 | 101kg×5 | 340l×2 |



## 乘法2の指導

**指導の要旨** 一桁繰上る場合の乘法を授け且つ1ダース=12を指導する。

**例題** 一冊128ページノ本3冊デハ幾ページニナルデセウ。

1. 前の例題と計算上の差異を發見させる。
2. それをどう解決するか工夫させる。
3. 正しき解法を指導する。即ち
   128ページ×3=384ページ

**說明**

```
   頁
  128
×   3
  384
```

a.

```
  128
  128
+ 128
   24……8+8+8=8×3
   60……20+20+20=20×3
  300……100+100+100=100×3
  384
```

是は更に下の如く展開される。

b.

```
  128
×   3
   24……8×3
   60……20×3
  300……100×3
  384……128×3
```

尙繰上る所を記憶すれば部分積を書いて行く上に省略が出來るから、

c. 128
× 3
384

となる。

此の發展の經路は一題や二題では決して呑み込めるものではないから、十分に理解出來る迄繼續して指導しなければならない。

**補充問題**

1. 私ドモノ學校ニハ1273人ノ生徒ガ居マス。此ノ様ナ學校ガ3ツアルト皆デ幾人ヰルコトニナリマスカ。
2. 箱ノ中ニ卵ガ25ハイツテ居マス。コンナ箱ガ3ツアルト皆デ卵ガ幾ツアリマスカ。
3. 次ノ掛算ヲシナサイ。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 124 | 246 | 216 | 315 | 28 |
| × 3 | × 2 | × 4 | × 3 | + 2 |
| 192 | 273 | 151 | 493 | 150 |
| × 4 | × 3 | × 5 | × 2 | × 6 |
| 72 | 81 | 52 | 41 | 35 |
| × 4 | × 3 | × 4 | × 5 | × 3 |

4. 次ノ掛算ヲシナサイ。

17×4　542×2　321×4　610×5
1803×4　206×3　3463×2　1462×2

5. 次ノ掛算ヲシナサイ。

16l×3　81g×9　2313m×3



| 人 | 本 | m | g | l |
|---|---|---|---|---|
| 124 | 234 | 231 | 221 | 123 |
| × 2 | × 2 | × 3 | × 4 | × 3 |
| 123 | 1231 | 134 | 14 | 12 |
| × 2 | × 3 | × 2 | × 2 | × 3 |

6. 次ノ計算ヲシナサイ。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 210 | 302 | 101 | 30 | 40 |
| × 3 | × 2 | × 5 | × 3 | × 2 |
| 10 | 2031 | 1022 | 30 | 20 |
| × 9 | × 3 | × 4 | × 2 | × 4 |

暗算教程について

暗算については既に述べた如く、教科書に記載された教程に依り、其の順序を追ふて進むだけでは何にもならない是は問題の標準を示したものであるから毎日の指導の間に此種の問題を巧に織り込んで繼續的に練習す可きである。

721kg×3　170l×4　218kg×4　130l×4
2015cm×4　1圓23錢×3　25cm×4　120m×2
15kg×5

1ダース=12……ノ指導

1ダース=12　これは日常使はれて居る事であるから兒童も大低經驗して居る筈である。鉛筆、鑵詰、ボール等を數へる場合に使用する。

**補充問題**

1. 鉛筆ガ5ダースアル、何本カ。
2. クレオン8ダースデハ何本カ。

## 乘法3の指導

**指導の要旨** 2桁以上繰上る場合の乘法を授け且1年=12月を指導する。

二桁以上繰上る場合の乘法で、細かく分類すれば既に表に掲げたやうに四種類になるが、とり分け述べる程の事もあるまい。

要は上位に繰上るべき數を忘れずに記憶して加へる點にある。理屈より練習が大切である。

**補充問題**

1. 次ノ掛算ヲシナサイ。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 715 | 612 | 816 | 923 | 738 |
| ×5 | ×7 | ×6 | ×4 | ×2 |
| 627 | 807 | 405 | | |
| ×3 | ×3 | ×4 | | |

2. 次ノ掛算ヲシナサイ。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 76 | 57 | 79 | 64 | 77 |
| ×8 | ×7 | ×5 | ×9 | ×7 |

3. 次ノ掛算ヲシナサイ。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 386 | 177 | 128 | 592 | 490 |
| ×2 | ×4 | ×7 | ×2 | ×6 |

4. 次ノ掛算ヲシナサイ。



| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 273 | 113 | 116 | 239 | 243 |
| ×3 | ×7 | ×7 | ×3 | ×3 |

5. 次ノ掛算ヲシナサイ。

193×4　994×2　408×7　278×3
481×8

6. 次ノ掛算ヲシナサイ

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 375 | 643 | 548 | 347 | 345 |
| ×7 | ×8 | ×5 | ×8 | ×9 |
| 816 | 437 | 925 | 386 | 928 |
| ×7 | ×3 | ×4 | ×6 | ×4 |

1日=24時　1時=60分　1週=7日……についての復習

**補充問題**

1. 4日ハ何時間カ又6日ハ何時間カ。
2. 5週ハ何日カ又8週ハ何日カ。
3. 7時間ハ何分カ、又9時間ハ何分カ。
4. 太郎ハ家デ毎日2時間勉强シマス、何分勉强スルコトニナリマスカ。

1年=12月……についての指導

これも兒童は既に知つて居る筈である。カレンダーでも示して解り易く理解させる事にしたらよい。

**補充問題**

二年ハ幾月カ、三年ハ幾月カ、又5年ハ幾月カ。

## 應用問題四の指導

應用問題に關しては初めに精しく意見を述べて置いたから今回は直ちに問題の吟味にうつる事にする。

**兒童用書所載の問題の分類**

A　量關係より

目方に關するもの……1題 (1)
長さに關するもの……3題 (2)(3)(4)
桝目に關するもの……1題 (5)
俵數の問題……1題 (6)
人數の問題……1題 (7)

B　數關係より

繰上たきもの……1題 (1)
繰上一桁あるもの……3題 (2)(4)(6)
繰上の二桁あるもの……2題 (3)(5)
繰上の三桁あるもの……1題 (7)

即ち以上の分類を見るに量關係は先づよいとして、數關係の方面から言ふと計算が一般に平易すぎて寧ろ暗算で解決しなければならぬと考へられる程度の物が多い感がある。そこで指導者は教科書の應用問題を出發點として數量についてもつと發展した問題を構成し、或は選擇して之を補充す可きであると思ふ。

**補充問題**



I　——教科書問題(1)に連關して——

1.「日本兒童文庫」1冊ノ目方ヲ測ツテ御覽ナサイ。(245g)、8冊デハ幾gデスカ。

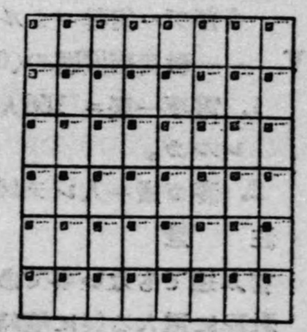
2. 煉瓦1個ノ目方ヲ測ツテゴラン。(2640g)
君等ハ一度ニ幾個持テルカ。サウスルト、皆デ何g持テルコトニナルカ。

II　——教科書問題(2)(3)に連關して——

1. 葉書ノ縦ノ長サハ幾cmアルカ、(　　cm)
又横ハイクラカ。(　　cm)

2. 縦ニ6枚ツナゲルト何程ノ長サニナルカ。又横ニ8枚ツナゲバドウカ。

3. 若シ右ノ圖ノ樣ニ縦ニ6枚横ニ8枚ツナゲルト、グルリノ周リハ何程ノ長サニナルカ



III　——教科書の(4)に連關して——

1. 君等ノ家カラ學校マデ何mアルカ。往復スルト何mアルクコトニナルカ。

2. 一郎サンノ家カラ學校マデハ 315m、花子サンノ家カラ學校マデハ 426m アル、毎日花子サンハ一郎サンヨリ何mヨケイニアルクカ、又一週間(6日)デハドウカ。